先生方とともに考える 新しい進路指導のパートナー

VIEW21

ビュー21

2014 February

2月

高校版

Volume 6

特集

主体的に生き抜く力を育む キャリア教育

新課程 教科指導最前線

観点別評価の意義とその実践のポイント

指導変革の軌跡

組織力向上 ◎ 鳥取県立倉吉東高校

課題研究 ◎ 茨城県・私立茗溪（めいけい）学園中学・高校

生きたデータの徹底研究

次年度につながる3年生指導の仕上げ方

ベネッセ教育総合研究所

http://berd.benesse.jp

VIEW21

2014 February

2月

高校版

Volume 6

CONTENTS

2 私を育てたあの時代、あの出会い

追い越したいと思う師の存在が私の授業力を高めてくれた
岐阜県・私立中京高校◎神戸忠一

4 特集

主体的に生き抜く力を育む キャリア教育

6 対談・・・・・・・ キャリア教育 その10年間の変遷、そして展望
和歌山県立桐蔭中学・高校校長◎宮下和己
ベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室室長◎木村治生

10 卒業生と振り返る 先進校のキャリア教育 成果とこれから
宮城県仙台向山高校
栃木県・私立文星芸術大学附属高校 英進科

20 座談会・・・・・・ 自校のキャリア教育を熟議し、「教育の本質」に迫る
東京大 大学総合教育研究センター准教授◎中原 淳
茨城県立日立北高校進路指導部副部長◎長山祐司
埼玉県立大宮光陵高校校長◎久保島昌一
三重県立特別支援学校西日野にじ学園校長◎鈴木達哉

26 特別レポート 小・中・高校の12年間を通じて教育課題を考え、語り合う
「Teachers' cafe」第1回ワークショップ報告

28 新課程 教科指導最前線

観点別評価の意義とその実践のポイント
インタビュー 東海大外国語教育センター准教授 長沼君主◎評価を軸にして授業を改善していく逆向きの発想が必要
学校事例 福岡県立香住丘高校◎CAN-DO評価を取り入れた観点別シラバスを作成し、授業を改善する

34 指導変革の軌跡

34 鳥取県立倉吉東高校
組織力向上◎分掌数削減、副担任廃止 組織改編を断行し、協働性・同僚性を喚起

38 茨城県・私立茗溪学園中学・高校
課題研究◎自分でテーマを決めた課題研究で限界に挑戦し、達成感、進路意識を高める

42 生きたデータの徹底研究

次年度につながる3年生指導の仕上げ方

46 半歩未来を考える教育オピニオン

世界で戦える人材を育てる 東京大・学部教育の総合改革
東京大副学長、大学院理学系研究科生物科学専攻教授 福田裕穂

50 未来をつくる大学の研究室

分子を計測する技術を開発し、生体への物質の影響力を立証
九州大大学院 総合理工学府 物質理工学専攻 原田明研究室

54 VIEW'S REPORT

グローバル化時代の人材育成を考える④
スーパーグローバルハイスクールで求められる取り組みのポイントとは
文部科学省初等中等教育局国際教育課課長補佐 河村裕美

58 【告知】ウェブで参観できる「シリーズ 授業大公開」がオープン!

60 Reader's VIEW

*本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます

http://berd.benesse.jp 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた あの時代、あの出会い

追い越したいと思う師の存在が私の授業力を高めてくれた

岐阜県・私立中京高校 神戸（かんべ）忠一

「この人のようになりたい」という思いは、努力し続けるための大きなモチベーションになる。そして憧れが「この人に勝ちたい」という目標に変わった時、そのモチベーションは更に大きくなる……。神戸先生が、先輩であり恩師でもある松浦先生を追い掛け続ける日々を語る。

「授業」の難しさを知る

松浦速人先生は、中京高校在学中の私に日本史を教えてくださった恩師です。20代半ばで体も声も大きかった松浦先生は、やんちゃな生徒からも一目置かれる存在でした。しかし、そんな松浦先生に対して、当時、日本史の楽しさの虜になり、特に入れ込んで勉強していた私は、特別進学クラスの授業を担当し始めて日の浅い先生をつかまえては、参考書で仕入れた知識を基に質問して先生をちょっと困らせてみるという、意地悪なことをしていました。ただ、そんな私の行動に対しても松浦先生は、「今は分からないから、次の授業までに調べてくる」とおっしゃって、そして約束通り次の授業で必ず説明してくださいました。

数年後、母校の教壇に立って分かったのは、自分が理解することと、生徒に理解させることは別ものだということです。特に、日本史が苦手な生徒に歴史の流れを理解させるにはどうすればよいか、とても悩みました。定期テストの結果を見る度、授業力の無さを痛感し、肩を落としました。新任からの3年間は悪戦苦闘の日々でした。

それでも4年目を迎える頃には、少しずつですが自分の授業に自信が持てるようになりました。全国模試でトップレベルの成績を上げる生徒も育ち、「これで松浦先生に並んだ」と思い始めた頃、松浦先生から引き継いだクラスで自分の授業の感想を聞いてみました。「正直に言って！」と促す私に、ある生徒が「本当に正直に言ってもいいですか？」と申し訳なさそうな表情を浮かべながら、「松浦先生の方が教え方がずっと上手です」と小さな声で答えました。

落ち込んで職員室に戻り、松浦先生に全てを話すと、先生は「自分にも同じ経験があるよ」と私におっしゃいました。私は、自分が生徒だった時に、松浦先生にしてきたことを気恥ずかしく思い出していました。そして、そんな私を松浦先生は、「自信を持って、これまで通り熱意ある授業をすればいいよ」と励ましてくださったのです。

真似て、追い越したい

松浦先生に追い付きたい。私は心からそう思いました。自分に何が足りないかをはっきりさせるためには、自分だけを見つめていても駄目だと考え、松浦先生の授業を見学し、先生が作ったプリントを分析しました。職員室で松浦先生が生徒の質問に答える言葉にも耳をそばだてる程で、松浦先生の全てを盗もうと思っていました。

松浦先生の授業ノートを見た時、「これだけしか教えていないのか」と驚きました。これでは生徒は伸びないのでは……。しかし実際に先生のノートを基

神戸先生が生徒としていた特別進学クラスを教えたのは教職4年目です。ベテランの後を継いで、自分にきちんと教えられるのか不安でした。だから「神戸くん」の質問に答えられなかった時は落ち込みましたし、随分鍛えられたと思います。彼の授業中の表情で、自分の授業の出来を判断していた程でした。

私は、大学では日本史を専攻していませんでしたから、その分、教師になってから必死で学びました。教科指導力を付けるためには、手間と時間を掛けるしかないというのは今も変わらない信念です。

知識を身に付けさえすれば、それで良い授業が出来るというわけではありません。

先輩教師の言葉

生徒が変わるのだから
授業準備にも
終わりはありません

岐阜県・私立中京高校
松浦速人

に授業をすると、生徒は実によく理解するのです。必要なものだけを残し、シンプルに教えることで、より理解が深まることに、私は初めて気が付きました。

自分の授業が本当に変わってきたのは7年目くらいからです。日本史が得意な子は手を掛けなくても伸び、苦手な子も「分かった」という表情を見せるようになりました。底上げをすることで上位層も伸びる授業が出来るようになったと思います。

教職22年目を迎えた今、松浦先生に追い付いてきたと思うこともありますが、同時に、超えられないという部分もたくさんあります。模試の設問別成績を分析すると、「きっとあの授業で自分が曖昧に説明したから、松浦先生と差がついてしまったのだ」といったことがよく分かります。1コマの授業での自分の甘さが、生徒の成績に表れてしまう現実に向き合いながら、松浦先生を追い掛けています。

松浦先生と私は授業スタイルは異なりますが、真似るべきところはたくさんあります。先生は毎年ノートやプリントを改訂しますから、私もそうしています。空き時間を見つけては入試問題を解く姿を見ると、負けられないと思います。先生から「○○しなさい」と言われたことは一度もありませんが、その姿から多くを今も学んでいます。

尊敬する松浦先生ですが、いつの日か、全てにおいて先生を上回り、完膚なきまでに勝利したいですね。そんな気持ちを素直に持ち続けられるのは、松浦先生が私にとって今も変わらず「先生」だからだと思います。

左 まつうら・はやと　地歴公民科。中京短期大学勤務を経て、中京高校へ。今年度で勤続33年目。

右 かんべ・ただかず　地歴公民科。初任以来、中京高校に勤務。今年度で勤続22年目。同校の卒業生でもある。

撮影◎中京高校にて

多くの知識を得たら、次に余計なものを削ぎ落とし、シンプルにする作業が必要です。これだけを理解すれば、他のことも理解したくなる……目指すのは「軸」を教える授業です。だから、私は神戸先生の授業を見学するなど、今も勉強を続けています。もちろん、長年日本史を教えていれば、大抵のことは分かるようになります。しかし、どのように教えればよく理解できるかという意味での教材研究には終わりはないと思います。

最近の生徒は語彙力が乏しいと言われていますから、生徒に説明する時の言葉は、以前とは違ってくるところもあるはずです。だから私は、授業ノートやプリントを毎年改訂しますし、今回の新課程に当たっては、そのほとんどを作り替えました。そのため、授業の準備が更に大変になりましたが、その分、新しい発見も多くありました。

今も自分の授業は反省点ばかりですし、職員室に戻って落ち込むこともあります。十分な準備をしないで教壇に立つことは、恐ろしくて出来ません。だからこれからも、地道に教材研究を続けようと思っています。

SPECIAL ISSUE

特集

主体的に生き抜く力を育むキャリア教育

「キャリア教育」は、「社会的・職業的自立」のための教育である。
しかし、学校現場からは、キャリア教育の重要性には共感しながらも、
実践においてはさまざまな難しさを感じている声が聞こえる。
今号では、改めてキャリア教育の価値を確認しながら、
生徒が主体的に生き抜く力を身に付けるための実践の方向性を考える。

学校現場の声「キャリア教育実践の難しさ」

◎「総合的な学習の時間」でキャリア教育を実践したいが、担任の先生方は受験へ向かうための指導を好む傾向がある。（宮城県）

◎進路学習は「どのような人として社会に貢献したいか、10、15 年後に自分らしく生きていられるか」を考えるものだとガイダンスなどで伝えているが、生徒が系統立てて考えられるシステムがない。（富山県）

◎「職業インタビュー」として、1年生の生徒が市内の公共機関や企業に出向き、インタビューを実施した。社会に触れる機会だったが、全員強制参加だったため、効果が薄くなってしまった。（静岡県）

◎就職希望の生徒を中心にインターンシップを推進しているが、企業側との調整も含めて、そのための環境整備がかなり困難である。（兵庫県）

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは、2013 年 10 月にウェブとファクスで実施。有効回答数は、60。

本号のテーマ

主体的に生き抜く力を育むキャリア教育を、どのように実践していくか?

現状整理

キャリア教育　その10年間の変遷、そして展望

対談【P.6～9】

和歌山県立桐蔭中学・高校校長
宮下和己（かつみ）

×

ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室室長
木村治生（はるお）

学校事例

先進校のキャリア教育　成果とこれから

卒業生と振り返る【P.10～19】

「生徒に『なぜ?』を問い掛ける中で、さまざまな変容を見いだしながら、未来をどう生きるかを考えさせる」
宮城県仙台向山（せんだいむかいやま）高校

「生徒を信じ、焦らず気付きを待つ中で、生徒と教師が共に成長する」
栃木県・私立文星芸術大学附属高校　英進科

課題解決への提案

自校のキャリア教育を熟議し、「教育の本質」に迫る

座談会【P.20～25】

東京大
大学総合教育
研究センター
准教授
中原　淳

茨城県立
日立北高校
進路指導部
副部長
長山祐司

埼玉県立
大宮光陵高校
校長
久保島昌一

三重県立
特別支援学校
西日野にじ学園
校長
鈴木達哉

視野を広げる

小・中・高校の12年間を通じて教育課題を考え、語り合う
「Teachers' cafe」第1回ワークショップ報告

特別レポート【P.26～27】

対談

キャリア教育 その10年間の変遷、そして展望

学校現場で「キャリア教育」が共通の取り組みとして行われるようになっておよそ10年が経った。キャリア教育はなぜ求められ、そしてどのように広まっていったのか。その変遷と課題及び今後の展望を、キャリア教育の研究・推進に長くかかわってきた和歌山県立桐蔭中学・高校の宮下和己（かつみ）校長に聞いた。

10年間を掛けてキャリア教育は整備された

宮下　「キャリア教育」に関する議論が始まったのは、今からちょうど10年前のことです。2003年4月、私は文部科学省国立教育政策研究所の生徒指導研究センター（当時）の総括研究官として着任し、前年から文部科学省でスタートしていた「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」に参加しました。ここで、学校におけるキャリア教育に関する議論が始まり、04年の1月には報告書を発表しました。キャリア教育について研究・開発を行ってきた私たちにとっては、まさにこの年は「キャリア教育元年」と言えます。

木村　およそ10年前から高校現場において「キャリア教育」という言葉が使われるようになったわけですが、それまで既に学校現場で広く使われていた「進路指導」とは、どのような違いを持って受け止められたのでしょうか。

宮下　進路指導の本質を理解していた教師にとっては、きっとキャリア教育も進路指導も言葉の違いでしかなかったでしょう。しかし当時、進路指導をいわゆる出口の「就職・進学指導」という小さな枠で捉えている教師もいました。そうした考えを大きく転換し、小中高を通じて改革を進めるために、キャリア教育が求められた側面もあると思います。

木村　当時は、日本の雇用環境が悪化し、ニートやフリーターの増加といった若者の課題も注目されていました。キャリア教育は、次代の日本を支える若者たちをどう育てるかという大きなテーマに向き合うものだったわけですね。

宮下　そうです。ただ当時、キャリア教育は「端的には、『児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育』」と捉えられていました。しかし、これはキャリア教育の半分の面しか説明していません。キャリア教育には、勤労観・職業観の育成だけでなく、社会で生きていくための資

図1　キャリア教育の定義

◎キャリア教育

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

＊キャリア発達…社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程

◎職業教育

一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育

出典／中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」2011年1月31日

質や能力の育成も含まれます。この定義が書かれた04年刊行の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」でも、「キャリア教育」は、「『キャリア』概念に基づき『児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育』ととらえ、端的には、『児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育』」とされていました。しかし、「端的には」の部分だけが注目されてしまったのです。

和歌山県立桐蔭中学・高校校長
宮下和己 みやした・かつみ
教職歴35年。和歌山県立箕島高校、向陽高校、和歌山県教育委員会を経て文部科学省へ。国立教育政策研究所生徒指導研究センター総括研究官、児童生徒課生徒指導調査官などを務める。その後、和歌山県教育委員会などを経て、2012年度より現職。

その後もキャリア教育をどう定義するか、さまざまな場で議論が続きました。そして11年、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義し、「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素を明確化しました（図1・2）。つまり、キャリア教育はおよそ10年を掛けて今の形に整理されてきたわけです。

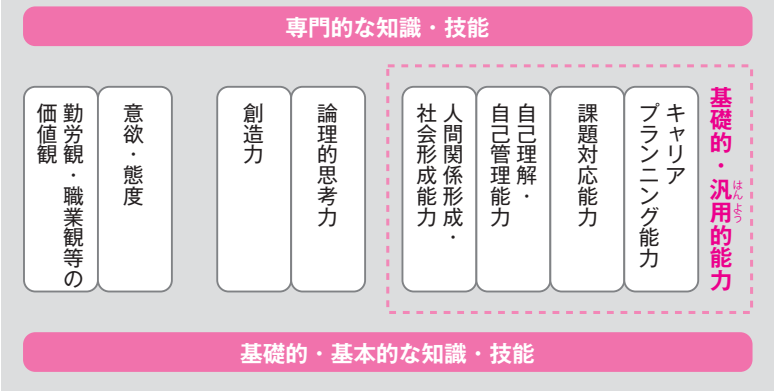
教科指導を含めた広い領域で展開すべき

木村 キャリア教育は、勤労観・職業観を育成することにとどまらず、人生で直面するさまざまな選択の場面で必要な意欲・態度、論理的思考力や創造力、課題対応能力をも身に付けようとするものだとすれば、これは、変化が激しいこれからの社会を生きる上で必要とされる「21世紀型能力」にも通じるものだと思います。「21世紀型能力」には、基礎的な知識・技能を実生活に生かして、自律的に社会に参画していくような力が含まれます。PISA2012の結果では、そのような力のベースになる学習への興味や有用感について肯定的に答える子どもの比率が低い状況でした（P.8図3）。「学びが将来にどうつながっているか」がはっきりと見えないことが、学びに対する意欲や態度に影響を与えている気がします。

ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室
室長
木村治生 きむら・はるお

宮下 本来、キャリア教育に求められたことの1つは、子どもたちの学びへの意欲を高めることです。04年の報告書でも、学びが将来社会の中で自立して生きていくために必要であることを子どもたちに伝える重要性について言及しています。「学ぶこと、働くこと、生きること」を考えるのがキャリア教育だと私たちは考えたのです。しかし、学ぶことが自分の人生をどう切り拓くのか、生

図2 「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素



出典／中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」2011年1月31日

徒がイメージするのは簡単ではありません。

木村　中学、高校と成長するにしたがって、自分の存在の意味を問いながら「なぜ、こんな勉強をしているのか」と考え、悩むものです。先生方が、人生という文脈の中で学びの意味を語ることも必要でしょう。

宮下　諸外国の教科書には、冒頭で「この教科を学ぶことがどんな仕事につながり、将来どんな役に立つのか」を説明しているものがあります。日本でも、授業中に教師が説明することはありますが、教育活動の中で必ず行うものとはなっていません。しかし、今回の学習指導要領改訂では、中学校理科において、指導について配慮する事項として、「理科で学習することが様々な職業などと関係していることにも触れること」と明記されました。キャリア教育の観点ではこれは画期的なことですし、本来、高校を含めて、全ての教科で同様に記されるべきだと思います。

木村　進学指導に力を入れる高校ほど、授業の中で生徒が学ぶ意味を考え、生き方につなげられる指導が求められるのではないでしょうか。

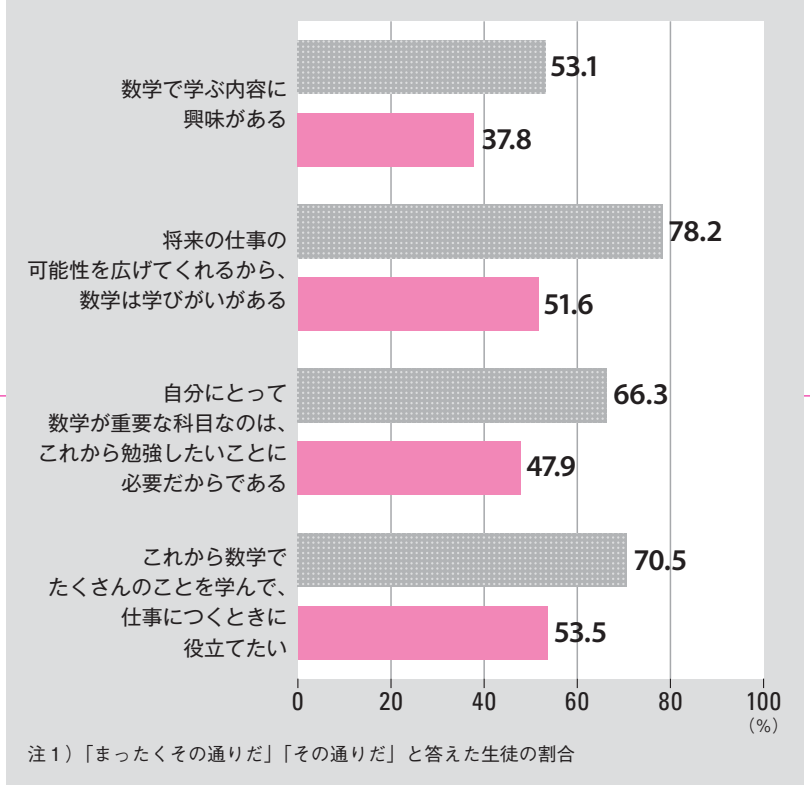
宮下　教科指導の中でもキャリア教育を推し進めることが、これからはますます重要になると思います。本校は今年度より、文部科学省からキャリア教育をテーマにした研究開発学校の指定を受けたこともあり、先生方には「桐蔭の学び」と題して、教科での学びや部活動の意義と共に、キャリアとの関係を「キャリアへの誘い」という項目で説明する文章を書いていただき、それを生徒に配布することを計画しています。学びの意味や面白さを教師が自分の言葉で語っていくことで、日々の授業も少しずつ変わっていくのではないかという気がします。

教師の豊かな人間力がキャリア教育を支える

宮下　キャリア教育の目標をひと言で言えば「社会的・職業的自立」ということになります。そして、真の自立のためには、生涯を通じて学び続ける人であることが求められます。その意味では、キャリア教育の真の成果は、すぐに確認できるものではないと言えます。ただ、成果はすぐに表れるものではないからこそ、これからの高校には、卒業生を追い掛けていくことが必要になるのではないでしょうか。例えば、大分県立日田三隈高校は、卒業生が30歳になった時、「30歳のレポート」を高校からの最終課題として提出してもらい、教育の検証に活用しています（本誌10年6月号でも紹介）。本校も研究開発学校になったのを契機に、卒業生を追跡調査していこうと考えていますが、そうした学校は今後増えてくると思います。

木村　高校在学中でも、活動の記録やそこで感じたこと、学んだことを記録するポートフォリオを活用することで、高校3年間の変化、成長を確認することが出来ますよね。

図3　数学に対する意識（PISA2012結果より）



注1）「まったくその通りだ」「その通りだ」と答えた生徒の割合

出典／文部科学省国立教育政策研究所『OECD生徒の学習到達度調査～2012年調査分析資料集～』（2013年12月）
＊2012年調査は数学的リテラシーを中心分野としているため、数学を中心に尋ねている

宮下　そう思います。そして、そうした振り返りの機会をつくることで、生徒の内面により深く定着するはずです。体験学習や講演会などの体験の場も、振り返りがなければ、活動の意味は生徒に定着しません。インターンシップの前の礼法指導も、あくまで直前の準備に過ぎません。インターンシップ参加が自校の生徒にどんな意味があるのかを教師が理解し、全ての教育活動を通じて、日々必要な指導や問い掛けを生徒に行うといった連続性・計画性を持ったものが、本来の事前指導であり、事後指導だと思います。

　また、キャリア教育の成果は、生徒の高校生活にさまざまな形で表れるものでもあると思います。学力が向上したり、進路や部活動での成果が上がったりといったことも、キャリア教育の成果を測る短期的な指標になる可能性もあるでしょう。重要なことは、多様な視点でキャリア教育の成果を検証することです。「常に学び続ける生徒」をキャリア教育で育てたいのであれば、まず私たちがキャリア教育を形骸化させぬよう、常に改善に取り組むべきでしょう。

木村　キャリア教育が社会と自分について広く考える活動である以上、大学や企業などの学外の機関との連携はますます重要になるはずです。学校が地域、更に保護者と結び付くためには、教師にも外部と連携する力が求められるように思います。

宮下　教師が総合的な人間力を備えていなければ、地域や保護者とも語り合えません。これからの時代、生徒に表現力やコミュニケーション能力が求められていますが、きっと、そうした教育を実現する立場の教師には、生徒以上にそれらの力が必要なのでしょう。本校のように地方にある高校は、キャリア教育で協力を得られる大学や企業の数は決して多くはありません。しかしその分、地域の企業や大学と綿密に議論できるため、質の高い校外学習を実施することは、教師の力があれば十分に可能です。

木村　キャリア教育そのものの歴史は10年ほどですが、この10年間で大きな枠組みができ、これから更に充実していく段階に入ること、そしてその本質は、日常の実践に多く埋め込まれているのだと改めて実感しました。言語活動の充実がそれぞれの教科の活動で実践されていくように、キャリア教育という視点で日頃の授業、部活動、クラス活動を捉え直すことが出来ると、よりそれぞれの価値が高まるように思いました。

宮下　キャリア教育は特別なイベントで構成される取り組みではありませんし、生徒に夢を描くことだけを求めるものでもありません。キャリア教育はもっと地道で、現実的な教育だと思います。私たちが育てたいのは、夢と希望を一生懸命追い掛けるけれど、失敗してもくじけず、現実の中で折り合いをつけながら生き抜いていける生徒です。これまでの実践や取り組みをキャリア教育の視点から見直し、高校生の発達の段階に見合った真のキャリア教育を追究する時代が来たのだと思います。

卒業生と振り返る

先進校のキャリア教育 成果とこれから

大きな環境変化が予想される社会で、主体的に生き抜くための能力や態度、価値観を養うキャリア教育。その取り組みを生徒はどのように受け止め、自身の成長へとつなげたのか。教師と卒業生が振り返る。

生徒に「なぜ？」を問い掛ける中でさまざまな変容を見いだしながら未来をどう生きるかを考えさせる

宮城県仙台向山（ぜんだいむかいやま）高校

働くことを通じた社会貢献をまず考える

――現在、仙台向山高校は「『つながる』3年間」をコンセプトとしたキャリア教育「向陵プラン」を実施している。1年次では、「社会とつながる」をテーマに、社会の課題への興味・関心を養い、それを解決する手段として働くことを考えさせる。その上で、職業人講話や事業所訪問などを行う。一連の取り組みが目的としているのは、社会貢献につながる使命感の醸成だ。

穂積　1年次の活動は、興味のある社会問題を生徒が書き、内容が似ている者をクラスを超えてグループ化することから始まります。これは君たち2人の在校時から変わりません。事業所訪問では、自分が調べた

宮城県仙台向山高校

見通しを持って進路を選び、主体的に自己実現する力を獲得し、「未来を切り拓く人材＝社会に貢献できる人材」の育成を目指した3年間の進路学習「向陵プラン」を実施。2011年度キャリア教育優良学校として文部科学大臣表彰を受ける。

◎1975（昭和50）年設立。全日制／普通科・理数科／共学。1学年約200人。13年度入試では、国公立大は岩手大、東北大、宮城教育大、山形大などに84人が合格。私立大は東北学院大、東北福祉大、法政大などに延べ240人が合格（現役のみ）

〒982-0832　宮城県仙台市太白区八木山緑町1-1／電話022-262-4130

http://mukaiyama.myswan.ne.jp/

▶▶▶2010年10月号「指導変革の軌跡」で同校の取り組みを紹介しています。

社会課題について、社会人がどのように解決策を模索しているかを聞くことを重視しており、中学校までの職場訪問とは大きく異なります。

宮城県仙台向山高校
穂積 暁
ほづみ・さとる
教職歴17年。同校に赴任して9年目。進路指導部部長。

宮城県仙台向山高校
作間偉也
さくま・ひでや
教職歴16年。同校に赴任して6年目。進路指導部副部長。

宮城県仙台向山高校 卒業生

吉田千里 よしだ・せんり
宮城大事業構想学部4年

鈴木 萌 すずき・もえ
東北大農学部4年

作間 訪問先の選定と依頼も、君たち自身で行いましたよね。2人は順調に承諾が得られたけれど、実は最初の段階ではかなりの生徒が断られるんです。悲しそうな表情で報告に来る生徒に、気持ちを切り替えて再度チャレンジするように促します。改めて訪問の意図を説明すると、「そこまで考えているのなら」と受け入れられることもよくあります。

穂積 私たちとしては、うまくいかない時にどうするかを考えさせたかったんです。失敗した原因を私たちと一緒に考えながらもう一度立ち上がり、次の策を考える力を身に付けさせようと思っていました。

鈴木 訪問を断られるのも大切な経験だと考えられていたなんて、当時は気が付きませんでした。私は、気象台を訪問したのですが、実は現場を見て、自分の想像とのズレを感じたんです。だからこそ、自分がどんな分野で社会に貢献したいかを改めて深く考えることができ、好きだった生物とのかかわりが深い農学への興味に気付けたのだと思います。

吉田 僕は中学校の先生を訪問したのですが、どんな話を聞いて、何を思ったか、実はあまり記憶にないんです。すみません……。

穂積 いや、それでいいんだよ。全員が同じ取り組みで、同じように気付きを得ることはないんだからね。

大学の学問を体感できる場を新たにつくった

——2年次の取り組みは、「学問とつながる」がテーマだ。2人は、興味がある学問調べ、大学のオープンキャンパスへの参加、そして志望理由書の作成を経験した。

穂積 当時も今も、2年次では志望する学問分野ごとに新たなグループをつくっています。1年生で福祉に興味を持ち、福祉ロボットに関連する企業を訪問した生徒が、2年生ではエコエンジンや宇宙開発からこの学問に関心を持った生徒と同じ「機械工学」のグループに入るわけです。メンバーと話す中で、学問から広がる進路の多様さを実感できます。

鈴木 私は東北大の農学部のオープンキャンパスに行きました。事前にグループで農学について調べていたので、大学院生にたくさん質問が出来て、この分野でやっていけそうな気がしました。オープンキャンパスの後は、「東北大農学部に入るためには何をすればよいか」を考え始め、9月から通学電車の中で英文を読むなど、学習習慣が大きく変わったんです。オープンキャンパスで大きな刺激を受けたことが、自分の変化につながったのだと思います。

吉田 僕は、宇都宮大の国際学部のオープンキャンパスに行きました。大学の雰囲気が分かったのはとてもよかったし、国際関係学は何でも出来そうな、面白そうな学問だと思いましたが、一方で、「これだけ研究テーマが多岐にわたるのなら、国際学部以外の学部でも学べることも多いのでは?」とも思いました。興味は持てたけれど、自分のやりたいことが絞りきれない状態でした。

穂積 2人はオープンキャンパスで学問を軸に大学像をつかもうとした

けれど、体験的な活動の場が限られていたり、1日だけの開催だったりと、学問を深く知りたいという期待に対してはやや物足りないと感じた生徒もいました。学問を考える場としては、オープンキャンパスだけでは限界があると感じ、2人の卒業後に立ち上げたのが「アカデミックインターンシップ」です。大学のゼミや実験など、日常的な研究活動を複数日掛けて体験し、大学の学びの意義を明確にしようというものです。

作間　工学系の学会に同行させてもらった生徒が「発表が全部英語だった！」とショックを受けて帰ってきたり、家畜の世話がいかに大変かを痛感して驚いたり……オープンキャンパス以上に大学の日常を実感できる活動になっていると思います。

穂積　「大学教授に、高校の勉強は大学の研究の土台だと教えられました」と生徒が報告に来ることもよくあります。生徒が大学でそのような話を聞くと、私たちも「入試のために」などと、目先の損得で授業の価値を語ることが出来なくなり、授業の質も変わってきます。こうした経験を経て、2年次の最後に取り組むのが、君たちも書いた志望理由書（**図1**）です。1年生からの活動を振り返り、何度も担任の添削を受けながら、3か月ほど掛けて志望を固めていきます。その時に私たちが心掛けていることは「それでいいの？」と問うことです。進路にはいろいろな道があるのだから、その多様な選択肢を生徒に示し、対話する中で生徒が主体的に考えを整理していくように導いているのです。

未来ではなく過去を問い そこから未来を考えさせる

吉田　2年生の時は穂積先生が担任でしたが、普段から先生といろいろな話をしましたよね。当時は「学習の記録」（**図2**）を毎日提出していたのですが、それを基に「英語が好きなんだな」と声を掛けてもらったこともありましたし、冗談っぽく「お前ら、そんなだと将来ろくな大人にならないぞ」なんておっしゃっていたこともありましたよね。でも、意外とそんな言葉が自分を振り返るきっかけになっていました。

穂積　そんなことを言ったかな？（笑）　でも、当時から「将来何になりたいの？」という質問はしないように気を付けていました。なぜなら、想定通りの人生を歩いていく人のほうが少ないのだから、不透明な未来のことを聞くよりも、「どれくらい勉強したの？」「なぜそうしたの？」「何を思ったの？」と過去を問い掛ける方が適切だと考えたからです。何もないところから自分探しや自己分析をするのではなく、過去を振り返ることで、おのずと未来が見えてくることを君たちに期待したんです。

作間　この学校に赴任して驚いたのは、「学習の記録」を毎日、ほぼ全

図1　志望理由書と、志望理由書作成のための構想メモ

２年生ではオープンキャンパス、アカデミックインターンシップへの参加、更に大学講師を招いた学問分野別講演会「向陵セミナー」などを経て、３学期に志望理由書を書く。事前に、志望のきっかけや社会的な意義などを一問一答形式で問う構想メモに取り組み、加えて志望理由書でも何度も担任のチェックを受ける。担任との対話を通して自分の志望を明確化する作業が３か月ほど続く
＊学校資料をそのまま掲載。ベネッセ教育総合研究所ウェブサイトにデータを掲載しています　http://berd.benesse.jp → HOME ＞教育情報＞高校向け

員から回収し、どの生徒が毎日どれくらい勉強しているか、教師が細かく把握していたことです。面談や「学習の記録」で、生徒の変わりつつある瞬間をつかみ、「君は変わろうとしているんだね」と認めてあげようと皆が心掛けていました。

穂積　私は、生徒が変わろうとしていることをキャッチし、後押しすることもキャリア教育だと考えています。その意味では、キャリア教育の成果は5年先、10年先を待たなくても、目の前の生徒から分かるものかもしれません。だからこそ私たち教師が、キャリア教育の取り組み一つひとつをつなげ、生徒と共に進路・学習・生活の3つの観点で変容を振り返るポートフォリオの更なる整備が必要だと考えています。

自分の好きなことが社会にどう役立つかが分かって、勉強への意欲が高まりました

東北大4年　鈴木 萌

自分に必要な力を見抜き行動できる意欲を持てた

吉田　僕が進路について真剣に考え始めたのは、野球部を引退した3年生の夏からでした。国際関係学には興味があったけれど、本当にそれでよいのか、モヤモヤした気持ちでした。最終的に志望校が決まる12月まで、勉強のこと以上に進路のことで焦っていました。だから、僕は向陵プランに沿って、順調に進路決定した生徒ではなかったんです。でも、部活動を引退して、受験大も決まっていないうちに、自分の将来につながる力を付けたいと思って、受験勉強の合間に、新聞記事を要約し、意見文を書くことを続けたんです。僕は自分の考えを論理的に説明するのが苦手だったのですが、そうした力は、大学入学後も必要だと思ったからです。「学習の記録」にも書かなかったので、担任だった作間先生も知らないはずですが、個別試験が終わるまで毎日続けたんです。目先のことを考えたら、センター試験対策に集中すべきだったのだろうけど。

作間　それは今日初めて知りました。でも、吉田くんは自分で決めたことはしっかり取り組める人だったから、納得できる気がしますよ。

穂積　大学には現役で合格するのに越したことはないけれど、それは最優先事項ではないと思います。むしろどういう状態で入学するかが大切で、吉田くんはその準備が出来ていたんだろうね。もちろん、その時間を対策に当てればもっと楽に合格できたかもしれないけれど、自分に必要な勉強を自分で見付けてやり続けた精神的な成長は、入試が終わってからも役に立つものだと思います。

鈴木　向陵プランは受験のための活

図2　学習の記録

学習時間を記録するだけでなく、日々の気付きを書く欄を設けるなど、生徒の変化を発見しやすいように改良が重ねられている
＊学校資料をそのまま掲載

動ではなく、「どういう人間になって社会に貢献したいかを考えるためのもの」と先生方は当時からおっしゃっていました。吉田くんが、将来の自分に何が必要かを考え、努力したのなら、それは先生方の教えの通りだと思うし、自分が知らないところでそんな努力をしていた同級生がいたことに私は感動しています。

高大の7年間を掛けて身に付けるべき力がある

——3年次では、「自分とつながる」をテーマに、それまでの活動を踏まえて課題研究に取り組む「サクセスタイム」が行われる。鈴木さん、吉田さんがいた当時は1、2年次の活動の焼き直しにとどまった面もあったが、近年はディベート活動など生徒同士が触発し合う場面を多く取り入れ、大きく変化しているという。

穂積　表現力やコミュニケーション力は、大学や社会で必要な力です。受験勉強に時間を割くべき時期に、そうした力の育成に高校がどこまで取り組むべきかという議論が現実にあることは理解しています。しかし、大学に全てを任せ、キャリア教育を先送りすることには私たちは反対です。将来の生き方について考え、表現力やコミュニケーション力を高めることは、高校3年間だけでも大学4年間だけでも足りません。高大の7年間で培うものだと思います。キャリア教育は、高校教師が果たすべき責務の1つです。

——キャリア教育の成果は、高校生活の細部に確かな変化として表れる。だが、それ以上に、生きていく中で直面するさまざまな予期せぬ出来事に向き合った時に見えてくると、穂積先生と作間先生は考える。

吉田　自分が向陵プランで身に付けたものは、「考える力」だと思います。就職活動でこれから自分が進むべき道を考えた時、高校時代からの経験や大学での国際交流ボランティアを振り返り、「自分の夢は、日本と海外の懸け橋になることだ」と明確に思いました。夢を実現する方法はいくつかあると思いますが、その一歩としてベトナムで事業展開する旅行会社に就職しようと思っています。

鈴木　私は、大学院に進学し、麹菌をモデルとした遺伝子工学を学んで、食品や製薬の分野で社会貢献したいと思っています。好きだった生物をどのように人生につなげていけるのか、自分で調べて考えた高校時代の経験があったから、意欲を持続させてこれたのだと思います。

穂積　私たちは君たちに「職業は夢ではない。どう社会貢献するかが夢だ」と繰り返し伝えてきました。吉田くんは、日本と海外の懸け橋という夢は譲ってはいけないけれど、選べるアプローチは今後も1つではないよね。夢を実現するために自分に正直に、柔軟に現実と向き合った吉田くん、一つひとつの気付きを受け流さず、主体的な行動につなげた鈴木さんの話を聞いて、2人が私たちの取り組みの成果を体現していると実感しました。2人には、社会がこれからどう変化しても、ぶれることのない軸が出来たのだと思います。

考える力が身に付いたことで自分の生き方を長い視点で描けるようになりました

宮城大4年　吉田千里

編集部の気付き

キャリア教育において穂積先生が重視したのが、教師間での理念の共有だ。向陵プランの意図をシラバスで明文化し、時にクラスを解体し、学年一体の活動だという雰囲気を醸成するなどの配慮が形骸化を防ぐのだろう。「生徒の変容を目にすると、教師自身も変わる」という穂積先生の言葉は、キャリア教育における教師の役割を考えさせるものだ。

生徒を信じ、焦らず気付きを待つ中で、生徒と教師が共に成長する

栃木県・私立文星芸術大学附属高校　英進科

書くことを通して生徒が自分と向き合う

――文星芸術大学附属高校の英進科は、2001年度に設置された。2期生が受験した05年度入試で筑波大、東京外国語大など国公立大に10人合格、早稲田大や上智大などの難関大を含む私立大に延べ47人合格という実績を早くも上げることに成功。全国の注目を集めた。5期生が挑んだ08年度入試で初めて東京大、京都大現役合格者が出るなど、その躍進の背景には、自ら学ぶ意欲を引き出す体系的な進路学習がある。

牧島　2期生の小川くんの頃から今も変わらず、英進科の進路指導のモットーは「進路指導は生き方指導」です。当時から、自己理解や職業・学問研究、大学研究から成る3年間を通した体系的な進路学習を「総合的な学習の時間」に行い（P.16図1）、君たちにも「将来を展望しながら、今自分は何をなすべきかを考える」ことを求めてきました。それは、自分の適性や将来の展望が見えれば高校生活の課題もおのずと明らかになり、目標や夢を持つことで主体的な学習が可能になると考えているからです。「進路観」の確立と共に大切にしているのが、書くことや考えることを通じて自分と向き合い、コミュニケーション能力を高めることです。6期生の磯崎くんが入学した06年度には、この理念を具現化した400字作文、ディベートもほぼ今と同じような内容で展開されるようになりました。ただ分量については、400字作文は3年間で書く回数は2倍に、ディベートの時間も1年生の3学期だけだったのが、4年前からは2年次の3学期も充てるようになり、倍増しています。

磯崎　社会問題や学問、大学などさまざまなテーマで、400字作文をたくさん書いたことはよく覚えています。牧島先生はもちろん、他の先生方も口をそろえて「書くことは考えることだ」「書けないとしたらそれは十分に考えていないからだ」と

栃木県・私立文星芸術大学附属高校　英進科

3年間の進路学習を通じて、将来を展望しながら今何をすべきかを考えさせる進路指導を展開。放課後の自主学習、400字作文やディベートなどとの相乗効果により、コミュニケーション能力などを含めた人間性の向上を図っている。

◎1911（明治44）年設立。全日制／英進科の他に普通科・総合ビジネス科／男子。1学年約340名（そのうち英進科60名）。13年度入試では、国公立大は山形大、宇都宮大、埼玉大、東京外国語大、東京学芸大などに18人が合格。私立大は上智大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ131人が合格（英進科・現浪計）

〒320-0865　栃木県宇都宮市睦町1-4／電話028-636-8585

http://www.bunsei-art.ac.jp/

▶▶▶2008年2月号「指導変革の軌跡」で同校の取り組みを紹介しています。

私たちに話してくださいました。正直、当時はそうした言葉の意味をきちんと理解してはいなかったかもしれません。ただ、「先生方がそうおっしゃるなら」という気持ちはありましたし、大学生になった先輩方が高校生活を振り返った文集「大学の窓から」（図2）でも、ほとんどの方が「400字作文に取り組んでよかった」と書いていたので、僕も「先生と先輩を信じよう」と思いました。添削も評価もなく、書くペースも生徒個々に任されていましたが、クラス全員、怠ける者もなく、当たり前のように取り組んでいました。

図1　英進科の進路シラバス（1年生1学期から抜粋）

実施月	テーマ	学習内容	使用教材	備考
4月	学習姿勢をチェックしよう B 進路探しを始めよう	学習の心得	【資料】学習の心得3か条	学習の心構えを育成する
		進路学習のねらい 進路学習教材について 進路学習計画について	【資料1】進路学習をはじめるにあたって	進路学習の流れを把握する
5月	C 自分のことをもっと知ろう	STEP 1 進路意識をチェックしてみよう	ノート B-1～3 スタートムック	進路意識をチェックする ムックP8～9を読む ※チェックをもとに「今後なすべき課題」を400字にまとめる
		STEP 1 適性・関心チェックにトライ!	ノート C-1～5 C-6～7	適性・関心をチェックする ノートC-6～7を読む ※チェックをもとに「感想や新しく気づいたこと」を400字にまとめる
	受験体験記を読もう	受験体験記の感想文を書く	受験体験記	事前に受験体験記を読み、感想文を400字にまとめる
	E 仕事研究を	STEP 2 仕事への視		ムック P2～11を読む

400字作文やディベートはシラバスにも明記されている

進路学習のテーマ・内容・教材を1年生1学期から3年生1学期まで月ごとに詳説する。
使用教材はベネッセの「進路サポート」
＊学校資料を基に編集部で作成。全文はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトに掲載
http://berd.benesse.jp → HOME ＞教育情報＞高校向け

評価を焦らず本人の気付きを待つ

染野　提出された作文には、目を通したことを示すサインはしますが、小論文対策ではないので点数を付けたり、書き方を指導したりは今もしていません。ただ、作文から生徒が考えていることはよく分かるので、清掃などの時間に声を掛け、話をすることはよくあります。

竹内　他校の先生から「評価しなくてもよいのですか？」「評価しないと生徒が書かなくなりませんか？」と実はよく聞かれるんです。でも、英進科ではもうそれが当たり前になっていますよね。「テストがなくても自主的に勉強する」ことと同じで、評価されなくても、それが意味のあることだと分かっているから、皆、書いているのだと私は思っています。

小川　きっと後輩たちは、評価はされないけれど、先生が読んでくれているということに安心感を覚えているはずです。だから、高校生の感性を生かして、テーマに対して思ったことを自由に書けるのでしょう。

牧島　キャリア教育には、職業や学問、大学について知る、いわば外的な刺激だけでなく、内的な刺激が必要です。書くことは考えることだからこそ、書くことを通して君たちは

図2　卒業生のメッセージ集「大学の窓から」

英進科を卒業した大学生が、母校での日々を振り返り、後輩にメッセージを送る「大学の窓から」には、400字作文やディベートによって得られた気付きがそれぞれの言葉でつづられている。教師、そして先輩の言葉があって、生徒たちも成果を急ぐことなく、自分を見つめる活動に没頭することが出来る
＊学校資料をそのまま掲載

主体的に生き抜く力を育むキャリア教育

文星芸術大学附属高校　英進科
牧島勝利
まきしま・かつとし
教職歴51年。同校に赴任して13年目。進学統括参与。

文星芸術大学附属高校　英進科
竹内昭夫
たけうち・あきお
教職歴32年。同校に赴任して14年目。英進科科長。

文星芸術大学附属高校　英進科
染野幸弘
そめの・ゆきひろ
教職歴17年。同校に赴任して18年目。英進科次長。

文星芸術大学附属高校　英進科　卒業生

磯崎　要
いそざき・かなめ
凸版印刷株式会社（社会人1年目）

小川和広
おがわ・かずひろ
株式会社日本経済新聞社（社会人5年目）

内的な刺激を受けていたのです。そして内的な刺激が「なぜ勉強するのか」という疑問を解消してくれた時、どの生徒も心の詰まりが取れたように主体的に学び始め、学力も大きく伸びるのです。君たちだってそうだったはずですよ。

磯崎　先生方はよく「ため込んだ知識が線になってつながる時が来る」とおっしゃっていましたよね。実際に私は、2年生の秋頃から、勉強が楽しいと思えるようになり、成績も上がり始めたんです。「先生方がおっしゃっていたことは、こういうことだったんだ！」と思いました。

牧島　キャリア教育は、本人の気付きを待つ教育です。自分で気付いた者は強いが、指示された通りにしか動かない者は弱い。だから、考える場を与え、君たちが気付くのを私たちは待ったのです。とはいえ、私たちも最初から「待つ」ことが出来ていたわけではありません。英進科創設当初は、放課後補習など、教師が手を掛ける指導に力を入れていました。小川くんはきっと記憶にあるはずです。でも目の前の生徒を見ると、明らかに知識の消化不良を起こしている。だから思い切って、教師が主導する補習はやめて、生徒が自分で必要な学習を考えて、自分のペースで学べる自主学習をする時間に切り替えたのです。当然「自主学習では生徒は怠けてしまう」という反対の声もありましたが、「自主学習の習慣がないからこそ、自主学習が出来るように育てよう」と考えたのです。私たち教師が我慢し、生徒を信頼しようと決断したことで、今は物音1つしないほど静かに自主学習が進められています。

自分自身の意外な一面に気付く場をつくる

——英進科のキャリア教育で見逃せないもう1つの軸が、1・2年次の3学期のディベート活動だ。今では、日々の授業や教師との対話など、さまざまな知的経験を生かしながら、生徒が一生懸命に取り組む活動になった。だが、生徒はディベートに熱くなりながらも、そこでの学びはディベートのスキルにとどまるものではないと理解している。

小川　ディベートの時に、先生から「相手を打ち負かす方法を覚えることが目的ではなく、異なる意見を聞きながら、自分の考えを深め、新しい考えをつくっていくすべを学ぶことに意味がある」と教えていただきました。ディベートを経験したおかげで、論理的なものの考え方、説明する力が養われたと思いますが、こうした力は新聞記者という仕事に限らず、社会で必要だと実感しています。論理的な思考力・表現力は、「こうすればよい」と説明されるだけで身に付くものではありませんから、高校時代の実体験はとても価値のあるものだと思います。

磯崎　私は、ディベートの事前準備で、グループでテーマについて調べた時に苦労したことをよく覚えています。同じ資料を前にしても、どう解釈するかは人それぞれ違います。他者と作業をすることの大変さを、ディベート活動で経験することが出来ました。

染野　ディベートは400字作文（図3）同様、「この生徒は、こんな一面を持っているんだ」と、授業中とは違う顔を知るチャンスなんです。生徒自身にとっても、自分を深く知る機会になっているはずです。

竹内　400字作文やディベートを続け、生徒が自分の内面を見つめる中で、「何かに気付く」生徒が必ず出てくるんです。でも、いつ、どのように気付くかは生徒によってさまざまで、こちらの思う通りにはいきません。また、何かに気が付いていることは分かるけれども、だからといって教師が声を掛けるべきか、あるいはまだあえて声を掛けないで見守るべきか、そこはすごく難しいところなんです。

図3　400字作文

2年　組　番 氏名

テーマ：今後なすべき課題

改めて自分の高校生活を振り返ってみると、生活面での服の緩みが、学習面にも影響を与えていることが分かった。私は先を見ない癖がある。大学受験があと1年もないのに大丈夫だと言い訳をつけて全然焦っていないというのもこれに当てはまる。先を見ない癖は、自分を現実からわざと引き離し、逃避状態にさせるのだ。それにより、勉強への欲求を失い、忘れ物をしたり授業で集中が切れたりすることが多くなる。今は一年生の時ほどではないが、時々忘れ物をしてしまうことがあるので油断は禁物だ。先を見る癖を意識して習慣づけるのは無理だと思うが、次の日の日程の確認や、授業に向けての予習はできるだろう。それに、毎日書いて提出している自習学習計画表も忘れてはならない。これは、勉強した後に書くのではなく、勉強する前に書くのが重要だ。日々の何かが来年につながるとよく聞くので、毎日勉強を怠らずに精進していきたい。

20×20

生徒が自分の心をさらけ出せるように、他の生徒にも紹介したい場合は、必ず本人の承諾を得た上で行う
＊学校資料をそのまま掲載

牧島　ディベートは準備も大変で、しかも最初のうちは不慣れですから、内容も深まりにくく、活発な議論になりません。しかし、生徒がやり方のコツをつかむと、見違えるように盛り上がるんです。そこまでいけば生徒たちも「またやりたい」と言い始めます。つまり、ディベートという活動でも、私たち教師が成果を焦らないことが重要なのです。

言葉は違っても先生方が同じことをおっしゃる。だから信じようと思いました

凸版印刷　磯崎 要

すぐには役立たないとしても大切なものがある

小川　牧島先生の「成果を焦らない」という言葉は、今思うと、英進科のキャリア教育のキーワードだったような気がします。400字作文も目先の小論文対策ではなく、生き方指導という先を見据えた教育に位置付けていらっしゃいますよね。私は教育の専門家ではありませんが、「すぐに役に立つようなことは、すぐに役に立たなくなる」と思うのです。そして、キャリア教育は、「すぐには役に立たないかもしれないけれど、後々まで役に立つもの」を身に付ける営みなのではないでしょうか。少なくとも英進科のキャリア教育はそうだったと思うのです。

磯崎　大学でもキャリア教育は行われますが、それはエントリーシートの書き方など、「就職」をゴールに据えた対策や指導になっています。高校時代に必要なキャリア教育は、英進科のキャリア教育のように先を見据えたもの、もっと言えば、ゴールがない教育だと思います。

小川　キャリア教育とは少し違うかもしれませんが、牧島先生の「入試を理由に勉強する教科を絞るのは、自分の可能性を狭めることになるし、必ずしも成績向上に結び付かない」という言葉が強く印象に残っています。当時からマスコミを目指していた私は、幅広い教養が必要だと考えましたし、「人生にとってマイナス」とまでおっしゃった牧島先生の言葉を信じて、3年生の秋までは、入試で課されない科目も予習復習を欠かしませんでした。今、新聞記者として各界のトップの方とさまざまなテーマでお話しする中で、先生の言葉の正しさを実感しています。

竹内　牧島先生の「全教科主義」には、当初私には「本当にそれでよいのか」と疑う気持ちもあったんです。でも、小川くんのように最後まで科目を絞らない生徒が素晴らしい結果

いつか役に立つ教育の大切さは社会の第一線で身を持って理解しています

日本経済新聞社　小川和広

を出すことが分かると、私も生徒に「科目を絞ることは必ずしもプラスにならない」と本心から言えるようになりました。教師が本気で信じないと生徒には伝わらないということに気が付いたのは、教師としての私自身の成長です。

染野　400字作文でも、私たち教師が生徒を信じることが強く求められています。私も最初のうちは、なかなか書いてこない生徒に対して「怠けているのでは?」と疑ったことがあります。でも、それが次第に「怠けている生徒」と「考えていて書けない生徒」の違いが見えるようになりました。「この生徒はきっと書いてくる」と信頼して待つようになると、書くのが苦手な生徒に対する声の掛け方が明らかに変わったことが自分でも分かりました。これも教師としての成長なんでしょうね。

学力向上と人間性の向上は不可分のもの

――社会で活躍する磯崎さん、小川さんは、高校におけるキャリア教育に何を期待しているのだろうか。

磯崎　私は2年生の秋に、一気に勉強が楽しくなりましたが、そこに至るまでは、勉強をつらいと思うこともよくありました。高校生はとても多感で、もろい部分をたくさん抱えています。私は両親の理解と支えがあって、苦しい時期を乗り越えられました。大学合格にとどまらない将来の目標の考え方や、そのための勉強の意義、高校で行われているキャリア教育の意図が、保護者にしっかりと伝わることが大切だと思います。保護者が成績に一喜一憂したり、目先の大学入試にとらわれたりするのはある意味当然でしょうから。

竹内　確かに、生活面や学習面で問題を抱えている生徒と話していくと、その原因が家庭にあることはよくあることです。その意味でも、保護者を巻き込んだキャリア教育というのは大切な視点ですね。

小川　高校と違って、大学はマス教育、専門教育の場です。結果を焦らない、人間性を高める教育が丁寧に行える場は高校が最後だと思います。だからこそ、すぐに役立つ教育だけではなく、いつか役に立つ教育を大切にして、社会の変化に柔軟に対応できるような素地を後輩につくっていただきたいと思います。

牧島　君たちが大学、そして社会で、さまざまな経験をし、そこからいろいろな教養や考え方を身に付けてきたことはよく分かります。今日の2人の姿を見ても、「学力向上と人間性の向上は不可分」だと改めて実感しました。そして、それは高校時代に培った素地があったからこそ、実現できたことなのだと信じています。高校時代だからつくることが出来る素地を、これからも大切にしていきたいと思います。

編集部の気付き

英進科が短期間で体系的なキャリア教育の枠組みを確立できたのは、「総合的な学習の時間」を牧島先生と担任のTT（チーム・ティーチング）で行うなど、英進科の先生方の組織力があってのことだろう。「ベテランの先生の指導ノウハウを更に継承し、教師一人ひとりが強く自立することが必要」という染野先生の決意は、成果を焦らないからこそ重要なものだ。

座談会

自校のキャリア教育を熟議し、「教育の本質」に迫る

各校で「キャリア教育」が取り組まれる中、学校現場はその狙いを改めて見つめ、再設計する時期に来ている。それぞれのフィールドでキャリア教育の研究や実践に取り組む4人がその方法論を語り合った。

キャリア教育の課題は組織疲労と合意形成

――P.6～19までの対談、事例では「将来を見据えさせて、なぜを問い続ける」「生徒の気付きを待つ」など、進路観や社会で生きる力を育むために必要なキャリア教育の基本姿勢が示された。では、各校はどのように指導を具現化し、生徒の主体性を育んでいけばよいのか。現場の課題の整理から座談会は始まった。

久保島　２００３年度の「総合的な学習の時間」の導入期には、各校でスクールアイデンティティ（ＳＩ）の検討が行われ、自校の教育理念を具現化する1つとして、キャリア教育が多くの高校でスタートしました。しかし、10年余りが過ぎて、行き詰まり感を覚えている学校もあります。特に、「あれも出来る、これもすべき」とイベント型の取り組みが肥大化し、組織疲労を起こしている学校は少なくないようです。

鈴木　人格の形成と市民性の育成に寄与する教育がキャリア教育だとすれば、不要だと考える高校教師はいないでしょう。しかし、何をどう実施するかという具体的な話になると、意欲的になれない教師集団が校内に出来てしまう。その背景には、肥大化するイベント型のキャリア教育への負担感に加えて、生徒や保護者の進路に対する期待に応え続けられるのかという不安があります。そのため特に進学校では、キャリア教育が更に発展していくには、進学実績という成果を譲ることなく、人間力育成を担保できる方法論が不可欠です。今年度からスタートした新課程では、言語活動の充実など、教育で求められることと、社会で求められることが一致し始めているとも言えます。授業の中にキャリア教育の要素が取り入れられやすくなり追い風と言えますが、負担感を減らしな

東京大　大学総合教育研究センター准教授
中原　淳　なかはら・じゅん

「大人の学びを科学する」をテーマに、企業・組織における人々の学習・コミュニケーション・リーダーシップについて研究。専門は経営学習論。著書に『職場学習論』（東京大学出版会）など。

茨城県立日立北高校進路指導部副部長
長山祐司　ながやま・ゆうじ

教職歴20年。茨城県立磯原高校を経て、茨城県立多賀高校へ。２０１１年度より日立北高校へ赴任。12年度、筑波大学大学院にて、「高等学校の学校改善過程における、組織的要因に関する実践研究」に取り組む。

がら、生徒の人間力の育成と進学実績の維持・向上を求めることを校内で共有することが今後は重要です。

長山 校内で共有されている成果規定が進路実績だけでは、キャリア教育の発展は難しいでしょう。生徒の人間力の向上に組織として取り組む姿勢の共有が、キャリア教育の推進、更には学校改革の第一歩だと皆が認識することが重要だと思います。

中原 実は、大学でも、キャリア教育は「異質なもの」として位置付けられ、一般的には不人気です。効果的なキャリア教育を行うためには、全学・組織レベルで、どのように生徒にキャリアを意識させるのか、という議論が必要なのですが、それがなされません。よって、キャリアセンターがつくられても、それが組織レベルにうまく位置付かない事態が生まれがちです。各部局・部門が変化を嫌い、既得権益を侵されるのではないか、ということに疑心暗鬼になりがちであることも一因です。結局、キャリア教育が機能していないとすれば、それは組織に問題があるのであって、抱えている課題は高校も大学も同じなのだと思います。

埼玉県立大宮光陵高校校長
久保島昌一 くぼしま・しょういち
教職歴35年。埼玉県立不動岡高校教諭時代には、将来を見据えて自ら学ぶ生徒を育む「F―プラン」の策定に尽力した。同校の教頭として再赴任した後、埼玉県立浦和高校教頭を務める。2013年度から現職。

三重県立特別支援学校西日野にじ学園校長
鈴木達哉 すずき・たつや
教職歴32年。三重県立川越高校で学校改革に携わり、進路指導主事として進学実績の向上に寄与する。三重県立津高校進路指導主事、三重県立神戸（かんべ）高校教頭を経て、2012年度から現職。

セクションの枠を超えるため求められる校長の覚悟

長山 キャリア教育は特定の教科が担うものではないからこそ、学校運営の根幹に据えられるものであり、求められるものも学校ごとに多様なはずです。私は前任校で、キャリア教育の校内議論に参加してきましたが、そこでは、学年・教科・分掌を横断する「ビジョン委員会」というプロジェクトチームが、「自校の生徒をどう育てるか」について、教師間の議論を促進し、SIの共有や実践の改善に大きな役割を果たしました。教師という仕事は、どうしても個業化する傾向にありますので、キャリア教育のような学校全体を巻き込む議論を行う時には、既存のセクションの枠を超える組織が必要だと思います。

鈴木 その上で、大きなベクトルを校長が示すと動きが早いでしょうね。「キャリア教育を学校全体で推進する」という雰囲気が未熟であるほど、校長が明確に宣言して動かし始めた方がスムーズでしょう。

長山 私の前任校でビジョン委員会が機能したのも、当時の校長が「学校を変えよう」と宣言し、ミドル層が主体となる委員会を支持してくださったことが大きいと思います。

久保島 00年ごろ、SIの検討が各校で行われた時も、校内にプロジェクトチームをつくる学校が多かったですね。ただ、そうした委員会は、シラバスを提案し、方向性を共有したら、解散した方がよいと思います。そうしないと、委員会任せになっていつかは形骸化するからです。加えて、教師の意識が耕されていない風土の中では、どんな取り組みも根付きません。校長がキャリア教育の必要性を訴え、校内にトップダウンとボトムアップの両方を機能させることが出来る人材、校内の教師のつなぎ役になる人材をプロジェクトチームの中心に据えることが重要です。

中原 組織のつくり方や動かし方には、こうすれば必ずうまくいくと

いうものはありません。ボトムアップ型かトップダウン型かと問われれば、久保島先生のおっしゃるとおり、状況に応じて両方の機能が果たせる組織でありたいものです。そもそも学校という組織は何か新しいことを始める時も、変わることなく日々動いていて、決して止まることがないユニークな組織です。企業では、トップが決断し、ある事業をストップさせて、集中化・効率化することは不可能ではありませんが、学校には教育活動をストップさせて考える余裕はありません。企業人の中には「教育は惰性で行われている」と批判する人もいますが、教育には惰性がなければいけない部分があり、その点において学校という組織を誤解していると思います。常に動かさなければいけないことは、教育の世界の大変なところです。

久保島　更に言えば、教師は1人1役では決してありません。教科、部活動、委員会など1人で何役も務めなければいけないのです。だからこそ、新しい取り組みを学校全体で考える時は、まず校長が覚悟を決めないといけないと思います。子どもを引き受けて育てていくのが学校の使命です。キャリア教育を通じて人間力を育むためには、その使命に基づき、校長が揺るぎない方針を出し、リードすることが大切だと思います。

キャリア教育の在り方を議論し日常化、スリム化を図る

――座談会のテーマは、組織づくりから具体的な取り組みの検証、見直しへと移っていく。どうすれば、人間力の育成と進学実績の維持・向上の両立を、負担感を減らしながら図ることが出来るのだろうか。

鈴木　私は「キャリア教育の日常化」が必要なのだと考えます。「総合的な学習の時間」などを活用して行うイベント型、非日常型のキャリア教育もある程度は必要ですが、それだけに頼りすぎていたように思います。日々の学習にも時間を掛けることが大切な中では、新たな取り組みを増やすのではなく、授業や部活動の中でもキャリア教育を行っていく姿勢がこれまで以上に必要になっていると思います。中でも、授業を通じたキャリア教育は最も重要です。授業中に書いたり、話し合ったりしながら考える場面を多く取り入れるアクティブ・ラーニングの導入など、具体的な授業改善を行い、卒業後にも伸びていくような素地を生徒に培っていくべきでしょう。

長山　日常化という意味では、文化祭、体育祭、クラスマッチなど、高校現場で伝統的に行われている学校行事も、人間関係を築く力を養う場として、キャリア教育に組み込んでいくべきものですね。

久保島　私は、全国でも有数の進学校にも勤務したのですが、その高校ではスポーツ大会や行事は伝統として受け継ぎ、決して減らすことはありませんでした。もちろん勉強にも一生懸命取り組み、授業では基礎基本を大事にしながら実験や実習をたくさん取り入れていました。勉強だけでなく、部活動、そして行事と、まさに二兎、三兎を追わせる学校で、生徒は毎日大変そうでしたが、明らかに社会で生き抜くための耐性が育まれていました。あの高校には、大

コラム1　対話を通して学びの意味を考える「高校生未来プロジェクト」

「高校生未来プロジェクト」は「社会と学びのつながりを実感することが、高校生を具体的な学びの行動に向かわせる」という仮説の下、社会との関連の中で学びの意味を高校生が自ら考える対話型ワークショップを行う、ベネッセ教育総合研究所による学びの意欲研究である。2012年12月に、オックスフォード大の苅谷剛彦教授の企画協力の下、ベネッセ教育研究開発センター（当時）が主催し、東京大本郷キャンパスの福武ラーニングスタジオにて、全国からの公募による34人の高校生を対象にワークショップを実施。13年度は、全国4校の公私立高校と、同ワークショップを共催実施している。そのうちの1校が、久保島先生が校長を務める埼玉県立大宮光陵高校である。大宮光陵高校では、課外授業の位置付けで、13年11月～14年2月まで、全4回で構成。土曜日の午後に1回あたり3時間で行い、高校1～3年生までの希望者約35人が参加している。

外部ファシリテーターの下、社会や学びについて互いの考えを語り合い、自分の気付きと向き合う中で、「社会への課題意識」や「学ぶ意味・目的」を深めている。

＊12年12月の「高校生未来プロジェクト」ワークショップの様子は、本誌13年6月号特集をご覧ください。

がかりで特化した取り組みはなかったけれど、日常の中で豊かな全人教育が行われていて、これもきっとキャリア教育なのだと私は思いました。実際、キャリア教育の先進校は

既に取り組みの「日常化」「スリム化」をテーマにしています。

鈴木　そうした高校は、SIをしっかりと踏まえた上で、有数の進学校として最も適切な形で「キャリア教育」を行っているのでしょう。キャリア教育は、全ての学校で行うべきものですが、他校の形だけを真似てうまくいくものではありません。

中原　キャリア教育が生徒の特性に応じて異なってくるのであれば、「私たちが教えている生徒にとって、必要なキャリア教育のあり方はどのようなものか」を校内で議論することを避けて通ることは出来ませんね。

振り返り、葛藤の場を設け取り組みをデザインし直す

中原　私がキャリア教育の必要性を感じるのは、学生たちの組織観や労働観がとても貧弱になっているからです。東京大の学生の中にも「大企業に入れば組織の歯車になってしまう」「ベンチャー企業ならば自分の夢を追って働ける」などと、ステレオタイプに社会を捉えている者は少なくありません。社会の仕組みがどうなっているかが大学入学までに十分理解できておらず、また、年齢が違う人など、異質な人に揉まれた経験も少ないように感じます。今後、企業がインターンシップなどを利用し、採用の実質的な前倒しを進めていけば、大学初年次のインターンシップやアルバイトなどが、裏側では採用施策として機能する可能性があり、高校でのキャリア教育は更に重要になります。

鈴木　この約10年間で、多くの高校が職場訪問や社会人講話など、多様な体験の場をつくり、生徒が社会に触れる機会は間違いなく増えてきました。それでも生徒たちが社会を理解できていないとすれば、体験が生徒の血肉となる場がないからなのでしょう。体験をバラバラのままで終わらせず、一つひとつの価値をつなげたり、振り返りをさせたりして、生徒自身の経験にさせるべきです。

久保島　私もそう思います。職場訪問や社会人講話など、社会に接する機会は豊富になっているのに、そこでの経験が「素通り」している生徒は少なくありません。私は、生徒には経験を振り返ること、すなわち省察の機会が必要だと思うのです。例えば、イベントの数を半分に減らしても構わないので、その分の時間を使って省察の場を設けて、一つひとつの取り組みを深める方が意味があると思っています。もちろん、生徒の気質によってはイベント的な取り組みが有効な学校もあるでしょう。ただそれでも、イベントはあくまでツールやきっかけに過ぎず、その後の省察の場が不可欠であることを教師は強く自覚すべきです。本校では、13年度より、ベネッセ教育総合研究所との共催で、学びの意味を生徒同士が対話を通して考え、学習意欲の向上へとつなげようという「高校生未来プロジェクト」を実践しています（**コラム1**参照）。11月から月に一度のペースで2月まで、学ぶことの意味や目的を語り合っていますが、時間を置きながら、少し長めのスパンで1つのテーマを考えることで、省察の時間が生徒に保証されて

います。そうした時間の中で、理想と現実の間を行き来しながら葛藤する過程でこそ、生徒は人間的に成長するのだと思います。

中原　企業の人材マネジメントも、最近は葛藤をデザインするという考え方が主流のようです。もちろん、具体的な手法は高校とでは異なるでしょうが、葛藤に向き合うことが社会でも大切にされている事実は、キャリア教育の在り方を考える上で念頭に置きたいところです。

鈴木　葛藤を生むためには、生徒が継続して考えられるような働き掛けが必要です。既存のキャリア教育の流れを踏襲しながら、タイミング良く振り返りの場面を持ち込むことなどで、葛藤を育むことは十分可能だと思います。

長山　自我同一性を確立できるよう、生徒に葛藤を与える活動になっているかという観点で、キャリア教育を検証することが必要ですね。

久保島　例えば、生徒が進路志望理由を書く時に「よし、頑張れ」とそのまま承認するのではなく、「本当にこの進路か?」「こんな可能性もあるのでは?」などと問い掛け、矛盾や理解不足を指摘しながら、何回も書き直させるのも1つの方法です。その活動自体のゴールはマッチングのように見えますが、これも明らかに葛藤を生むことに重きを置くものです。そのような過程が、変化の激しい社会を生き抜くための力を身に付けることにつながると思います。

主体的な生徒を育む覚悟が教師にあるか

長山　キャリア教育が単なる職業探し、学部・学科探しにとどまるかどうかは、私たち教師がキャリア教育をどう理解しているかにかかっているのでしょうね。教師は「反省的実践家」と言われながら、実際はキャリア教育について振り返りが十分ではなかったように思います。その意味では、省察の機会は教師にも必要だと思いますし、そうすることはキャリア教育の検証にとどまらず、私たちの職業人としての在り方を豊かにすることにつながるはずです。生徒の進路観には、身近な社会人としての我々の職業観も大きく影響するように思います。我々も、自分たちの取り組みや価値観を省察し、職業観を豊かにする必要があります。

鈴木　キャリア教育は「教育そのもの」であり、キャリア教育を議論し、実践することは、学校教育の本来の姿に立ち返ることです。その意味では、「キャリア教育」という言葉をわざわざ使う必要がなくなることが理想なのだと私は思っています。

中原　「キャリア教育は、教育そのものだ」という声が出てきた時、「だからキャリア教育は不要だ」という結論ではなく、「全ての活動をキャリア教育の視点で見直そう」となるはずですし、そんな風に「教育そのもの」をじっくり語る場が、学校には必要だと思います。そうした本質的な議論は、教師間での衝突や対立を生むこともあるでしょう。けれど、生徒が教師を見ているなら、新しいものをつくるために衝突を恐れずに議論する教師の生き方、働き方は生徒に伝播するはずです。

鈴木　私たちは、生徒に主体性を求めています。生徒に対して「主体的

コラム2　「大人の学びを科学する」中原先生のユニークな活動

経営学習論を専門とする中原先生は、大学での研究活動と並行して、社会人のための学びのワークショップを数多くプロデュースしている。例えば、2005年から11年まで企業や組織の人材育成、モチベーションアップなどをテーマに東京大本郷キャンパスの福武ラーニングスタジオなどで開催されてきた研究者と実務家のための研究会「ラーニングバー」もその1つだ。中原ゼミの学生たちが運営に参加し、音楽や飲食物に一工夫を凝らした大人のための学びの場は、定員を大きく上回る応募者を集める人気のセミナーとして広く知られた。近年では、中原先生が代表理事を務める一般社団法人経営学習研究所の主催で、日本フィルハーモニー交響楽団のリハーサル風景見学と本番のコンサート鑑賞から、「プロフェッショナルとして活躍するには何が大切なのか?」について、参加者が対話を通して気付きを振り返る「オーケストラに聴くプロフェッショナルの学び」などのイベントを開催している。

＊詳しい内容は中原先生のウェブサイトでご覧ください。
http://www.nakahara-lab.net

に考え、行動する人であってほしい」と思うのは、社会がそうした人材を求めているからです。しかしそうであれば、まず私たちが社会人として主体的でなければならないはずです。衝突や対立を恐れて議論を先送りにする集団であったとしたら、そこには主体性は存在しないと言わざるを得ませんし、「実は我々は、生徒にも主体性など求めていなかったのではないか?」と厳しく自戒しなければいけないと思うのです。

久保島　生徒が主体性を発揮した時、私たちにそれを受け止める覚悟があるか、それも問われているのでしょうね。生徒に自由な発言を促したのならば、その言葉をしっかりと引き受けなければならないし、それを生徒からの問題提起として生徒の成長へと還元しなければいけません。そのためには、生徒の主体性を受け止める覚悟はもちろん、面談などのスキルの面でも更に訓練を積む必要が私たちにはあるはずです。

中原　かつては企業でも、社員が上司と異なる主張をすると「組織を乱すな」と批判されるなど、主体性は歓迎されませんでした。しかし、そうした日本企業の風土も、変わりつつあります。現代の繁栄は、地球規模での富は着実に増えているのに、豊かさに続く道を誰もが歩けるわけではないという矛盾に満ちたものです。だからこそ自分で歩く道を選べる人、主体的に行動でき、革新的な創造が出来る人が企業でも求められています。そうした人材は過去を壊して新しいものをつくるのですから、必ず衝突や対立を生みますが、それなくして成長はありません。

生涯を通じたキャリア発達に高校教師としてどうかかわるか

長山　日本は、25歳以上の大学生が少なく、やり直しや再挑戦がしにくい社会だと言われてきました。私たち教師の心の内には、そうした現実があったから、生徒に失敗をさせたくないという心理が働き、新しい人材像をしっかりと提示できていなかったのかもしれません。しかし、「国際バカロレアの学習者像」の中にも、Risk-takers（挑戦する人）、Reflective（振り返りができる人）などが含まれています。そのような生徒を育むことは、国際水準に照らしても大切だと思います。

中原　東京大では今年度から、大学の教壇を目指す院生を対象とした「フューチャーファカルティプログラム」を始めています。ここでは、大学生が主体的に学ぶために必要な教員の姿勢や授業デザイン、評価方法を体験的に学びます。長い目で見れば、ここで学んだ人材が大学教育を少しずつ変えていくと思います。

鈴木　主体性は、教師が「与えるもの」ではなく、生徒の中に生まれるのを「待つもの」だと思います。もちろん、生徒の葛藤する様子を見守り、気付きを待つのは私たちにとって楽なことではありません。それでも課題研究などに真剣に取り組み、時には苦しみの表情も見せていた生徒の感想文の中に「楽しかった」という言葉を発見した時、私は生徒を信じて待つことの大切さを、生徒から学んでいるように思います。

長山　同僚と「それこそが私たちのやりがいなんだ」と喜びを共有し、支え合える学校でありたいですね。

中原　私が駒場で行っている授業では、学生が学外のさまざまな人たちにインタビューをし、まとめる活動もしていました。学生にはかなり大変な作業ですが、私は学生に「ハード・ファンだ」と話すのです。「大変だけど、楽しいよ」と。キャリア教育にも通じる活動で学生が外に出ることにはリスクもありますが、それを受け止める覚悟を大学教員として私も持ち続けたいと思います。

久保島　本物の学びにおいては、楽しさと苦しさは二項対立ではなく、苦しさの中に楽しさがあるのだと思います。そして、キャリア教育が人間教育ならば、成果は常に目に見えるものでもなければ、学校だけで求められるものでもないでしょう。成果は生徒自らが人生の中で出すもので、そのことを念頭に置きながら、高校教師としてどうかかわるのか、私も「葛藤」を抱えながら考え続けたいと思います。

特別レポート

小・中・高校の12年間を通じて教育課題を考え、語り合う

「Teachers' cafe」第1回ワークショップ報告

特集テーマである「キャリア教育」は、高校段階だけでなく、小学校、中学校と子どもの成長を連続的に捉えて、指導のあり方を考えることが大切だろう。そのような課題意識の下、ベネッセ教育総合研究所は、学校種を超えて先生方が語り合うワークショップを開催した。

学校種を超えて子どもの未来を考える

グローバル化や情報化など、今後の社会環境の変化に対応し、「生きる力」を育むためには、学校種を超えて、子どもの成長を連続的に捉えていくことが一層重要になる。教育現場ではこの必要性を踏まえた取り組みが行われており、『VIEW21』小・中・高校版でも、多くの小中連携、中高連携などの事例を紹介してきた。しかし、先生方へのアンケートなどから、自治体などの公的な働き掛けがないと、学校種を超えて先生方が直接語り合う機会を持つのはなかなか難しいことが見えてきた。

そこで、ベネッセ教育総合研究所は、小・中・高校の先生方がさまざまな教育テーマについて率直に語り合い、ワークショップなどを通じてオピニオンをつくり上げていく「Teachers' cafe」を企画した。

見えてきた小中高をつなぐキーワード

第1回ワークショップは「12年間を通したより良い学び」をテーマに、2013年9月に開催。全国から19人の先生方が参加した。やや緊張した先生方の雰囲気は、「現状を知り合う」セッションを機に変化していった。開始直後は、他の学校種に対する疑問や要望に偏りがちだった議論は、互いの状況や思いが分かるにつれ、連携して子どもを育むための検討になっていった。その後、個々の関心に沿って、「志」「学力保障」「生きぬく力」「学びの意欲」「キャリア教育」の5つのチームを編成し、12年間で実現させたいことやそのためのアイデアをオピニオンとしてまとめるところまで共通理解が進んだ。

議論が深まっていった背景には、「より良い学び」のためのキーワードを、学校種を超えて共有できたことがあろう。「学び続ける意欲」「自尊感情」「伝え合う力」「教師の専門性」など、学校種ごとに用いる言葉が違ったとしても、目指す子どもの姿、そのための指導への課題意識や熱意は同じだと確認できた。それぞれの学校種でどのように指導し、12年間をつなげていくのかは今後の課題だ。今回の議論を生かしながら、先生方と共に考えていきたい。

Teachers' cafe 第1回ワークショップ概要

- ◎目的　小学校、中学校、高校の先生方が率直に語り合い、「12年間を通したより良い学びのために、教師が出来ること」を共に考え、現場教師発のオピニオンとしてウェブサイトなどを通じて発信すること
- ◎日時　2013年9月28日（土）13〜18時
- ◎参加者　全国の先生方19人（小学校7人、中学校6人、高校・大学6人）
- ◎募集方法　『VIEW21』小学版・中学版・高校版の各読者モニターへのご案内など
- ◎会場　（株）ベネッセコーポレーション新宿オフィス
- ◎主催　ベネッセ教育総合研究所「Teachers' cafe」事務局
- ◎企画運営協力・当日ファシリテート　與良昌浩氏（株式会社もくてき）、宮崎圭介氏（株式会社 スコラ・コンサルト）

ワークショップの流れ

13:00 オリエンテーション、自己紹介

14:00 ワールドカフェ形式（＊）で「現状を知り合う」

異なる学校種の先生4〜5人でグループをつくり、語り合う。1テーマ2ラウンド、計4ラウンドを、各回グループを替えながら行った。

＊ワールドカフェ形式：組み合わせを替えながら、少人数での会話を積み重ね、組織的な探求につなげていく対話の手法。

◎1・2ラウンド（各20分）

「12年間を通した学び」を考える上で小学校、中学校、高校それぞれについて、どんな「良さ」「問題点」を感じているか?

◎3・4ラウンド（各15分）

「12年間を通した学び」がどうなれば理想的だと思うか? そのためには何が必要か?

15:40 休憩

15:50 「オピニオンをつくる」

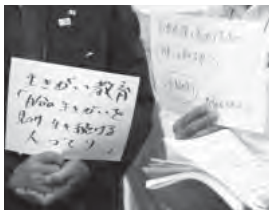
◎「12年間を通したより良い学びのために、教師（私たち）が出来ること」として、話し合いたいテーマを個々で考えて提示

◎テーマに沿ってチームを組み、チームごとにオピニオンをつくる

17:00 発表

◎5チームがそれぞれのオピニオンを発表

17:20 まとめ



当日の様子や先生方のオピニオンはウェブサイトで詳しくご覧いただけます!

ワークショップの様子や先生方が作成したオピニオンなどは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト内「Teachers' cafe通信」に掲載しています。ご意見がございましたら、フェイスブックやツイッターでぜひお寄せください。また、2014年２月に開催予定の第２回ワークショップについても随時お伝えしていきます。

http://berd.benesse.jp/tcafe/

ベネッセ教育総合研究所は幼稚園・保育所、小学校、中学校、高校、大学の先生方を支援しています!

ベネッセ教育総合研究所は、園から大学までの教育・保育に携わる方々を対象とした教育情報誌を刊行しています。記事は全て、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトにPDFで掲載しています。ぜひ一度、ご覧ください。

http://berd.benesse.jp/ ＞教育情報

＊新規での冊子のご送付のご依頼は承っていません。ご了承ください。

参加した先生方からのご意見・ご感想

◎「教師が率直に語り合い、オピニオンをつくる」ことは、とても大切だと思う。ボトムアップで「未来の教育」に貢献できるとしたら、教師冥利（みょうり）に尽きる。（栃木県／小学校）

◎異なる地域であっても、基本的に同じ方向性だと感じた。12年間を見通すためには、校種が違う先生方ともっと踏み込んだ意見交換があるとよいと思う。（香川県／小学校）

◎ワークショップでは、時間が経つのが実に早く感じられた。今後、近隣の小・中学校で交流会があるので、この内容の一端は話し合いの中で還元していきたい。まずは、自分の足元から一歩一歩である。（北海道／中学校）

◎教育について多様な考え方があること、自分の知らないことが小学校や高校にたくさんあることを学んだ。出来れば、このような場を今後も設けてほしい。（岐阜県／中学校）

◎学校種の違いを感じることなく、いろいろな先生方と1日を過ごせた。さまざまな教育活動に取り組む先生方の情熱は同じものだからだろう。校種を超えて縦にもニューロンを伸ばしていけたら、私たち教師の努力は、よりストレートに生徒に届くと感じた。（岩手県／高校）

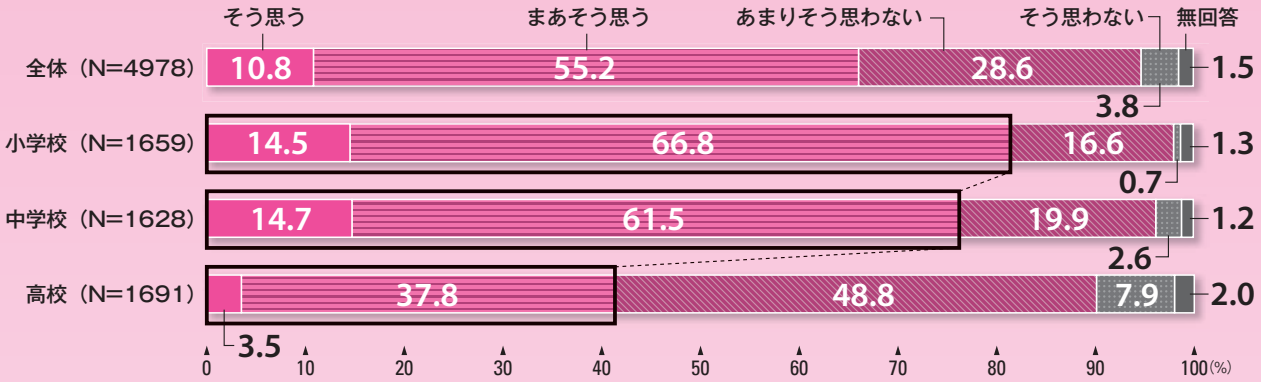
◎全国の先生方から大いに刺激を受けると共に、直面する一つひとつの課題を克服するためには校種を超えた協力が欠かせないことを実感した。これを機に先生方と連絡を取り合って小中高の連携のあり方を考えていきたい。（福井県／高校）

観点別評価の意義とその実践のポイント

新課程において、なお一層その実践が求められている観点別評価。
しかしながら、小・中学校に比べると、高校現場では観点別評価の定着は十分とは言えず、
４観点の中でも「知識・理解」の評価に重きを置く傾向がある。
今後、高校に観点別評価を定着させていくためには、
その意義をまず現場の教師が理解することが重要になる。
そこで、今号では、観点別評価の先進的な研究・実践例を基に、
観点別評価の意義とその実践のポイントを考える。

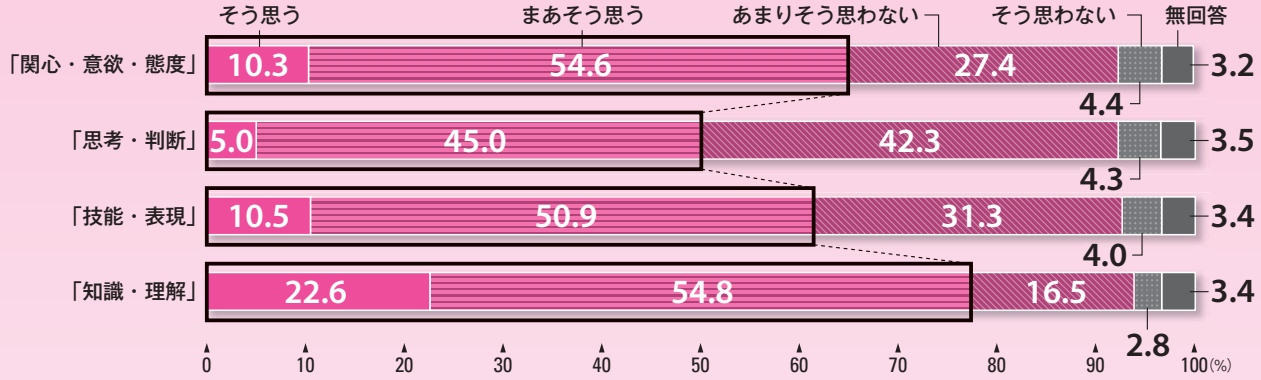
●４観点の評価の定着に関する小・中・高等学校の教師の意識の比較

いわゆる４観点の評価は実践の蓄積があり、定着してきている



●観点別学習状況の評価の実施に関する高等学校の教師の意識（観点ごとの比較）

評価の資料の分析、評価の決定を円滑に実施できている　観点別学習状況の評価の実施状況〔高校（N=1691）〕



出典：平成21年度文部科学省委託調査「学習指導と学習評価に対する意識調査」

インタビュー

評価を軸にして授業を改善していく逆向きの発想が必要

東海大外国語教育センター准教授 長沼君主（なおゆき）

観点別評価に見合った授業になっているか？

新課程では、きめ細かい学習指導と一人ひとりの学習内容の定着のため、生徒の学習状況を分析的に捉える4観点による評価が実施されている。だが、小学校や中学校と比べると、高校では観点別評価はまだ「評価のあり方の1つ」にとどまっているケースが少なくない。しかし、東海大外国語教育センター准教授の長沼君主先生は「観点別評価の理念は、授業改善を求める『指導と評価の一体化』にこそある」と説明する。

「『知識・理解』『技能』『思考・判断・表現』『関心・意欲・態度』の4観点を踏まえて評価するということは、4観点を統合的にバランス良く評価できる授業が求められているということです。また、定期テストなどの筆記テストで測れる結果だけに基づいた偏った評価から脱却し、授業中のパフォーマンス評価やポートフォリオ評価など多様な評価を組み入れ、日頃行っている授業内の活動での取り組みも客観的に評価することは、生徒に対する説明責任を果たすことにもなります」（長沼先生）

だが、高校に観点別評価の理念が浸透し、実際の授業に反映されているかと言えば、現状は必ずしもそうとは言えない。その背景には、「4観点に明確に分けて評価できるのか」「『関心・意欲・態度』などは、印象評価になってしまうのではないか」などの戸惑いが今もって現場にあることが大きい。だが、新課程において、教科を問わず求められることになった「言語活動の充実」は、知識・理解偏重の授業観にとらわれず、観点別評価を組み入れた言語活動や評価のあり方を各校が改めて見直し、授業を変えるきっかけとなると長沼先生は考える。

「新課程でうたわれている言語活動は、協同学習やプロジェクト型学習などでの言葉を使った活動を通して身に付けた知識を使える知識にすることで、思考力や判断力、表現力を高めることを狙いとしています。それによって、知識重視型の教科では測りにくかった『思考・判断・表現』『関心・意欲・態度』といった観点が評価しやすくなるはずです。ただし、知識や理解のないところに深い思考や判断は宿らず、表現をするためには十分なインプットが必要となります。関心・意欲・態度も何もないところから表れるのではなく、知識・理解や技能と密接に結び付いています。言語活動における具体的な活動への取り組みの度合いに、質的にしっかりと位置付けることで、挙手や課題提出の回数などといった数値化しやすい表層的な関心・意欲・態度だけにとらわれない、深く知ろうとする態度や積極的に考える姿勢などの評価が可能となります。観点を個別に考えるのではなく、それぞれを関連づけ、統合した評価のあり方とそれを保証する言語活動の充実について議論していくことで、観点別評価の仕方や客観性の維持についてのコンセンサスが生まれてくるでしょう」

ながぬま・なおゆき　清泉女子大文学部英語英文学科講師、東京外国語大世界言語社会教育センター講師などを経て現職。専門は言語学習動機づけ、言語テスト論など。文部科学省「外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定に関する検討会議」委員などを務める。著書に『動機づけ研究の最前線』（北大路書房）など。

内発的動機づけを重視した授業設計が重要に

英語の場合、新課程ではこれまでの「英語Ⅰ」に代わり、インプットに基づいたコミュニケーション活動を重視した「コミュニケーション英語Ⅰ」などが設けられた。そして、授業は英語で行うことが基本となるなど、理解に基づいた表現を通して、4技能を統合的に育成するための環境整備が進んだ。更に、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で具体化し、指導と評価の改善に活用することが求められている。

科目構成や目標の設定などが大きく変わった英語だが、福岡県立香住丘（すみがおか）高校の「CAN-DOリスト」の共同研究にも取り組む長沼先生は、同校におけるスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の実践が1つの参考になると説明する。

「SSHでは『科学的探究力』の育成をテーマとして、英語での『伝え合う力』の育成との両面から研究を推進しています。中でも重要視しているのは、日常知と科学的知識との結び付けで、科学についての日頃の興味・関心を気軽に語り合う場として、『サイエンス・カフェ』の試みを始めています。生徒の知的好奇心を刺激し、探究力の土台をつくるには、教師が教科書の内容だけでなく、普段から分野に関連した話題に広く関心を持つことが大切です。日々のニュースや最近読んだ本などを話題に、教科を離れて語り合うことで、疑問に感じ、知りたいと思う探究力や好奇心、思考力の芽が育ちます。それを授業にうまくつなげて、教科の内容を深化させていくには、教師側の探究力と日常知を引き出す教材研究が必要となります。香住丘高校では、英語の授業においても、教科書を学ぶのではなく、教科書を通して何かを学ぶことに重きを置いており、認知・思考力を高めるための授業の発問シナリオ作りを行い、知識を使う中で興味づける仕掛けづくりをしています」

主体的に学び続ける人材の育成が求められる中で、定期テストや入試といった外発的な動機づけに依存した学習ではなく、興味・関心をベースにした内発的な動機づけによる学習経験がますます重要になっている。観点別評価とそれに対応した授業を構築することは、より生徒の好奇心を喚起しやすい授業をつくることにつながると長沼先生は語る。

「本来、評価を変えれば授業そのものも大きく変わるべきであり、授業を変えないまま、評価の仕方だけを変えるのは本末転倒です。評価、つまり育成したい人材・能力像から授業を設計する逆向き設計の発想が求められます」

出来る実感を高める仕組みは全教科で必要

自律的な学習者の育成には、学問そのものへの興味・関心を生徒の内面に喚起するだけでなく、学習への自己効力、すなわち、出来るという実感を育み、学習過程を振り返り、内省する力を付けていく必要がある。そうした力は本来全教科で付けるべき力であると長沼先生は話す。

「英語で作成しているCAN-DOリストは、生徒の『出来る実感』『出来るようになりつつある実感』を高めるもので、自律的な学習を支える動機づけになります。現在は英語だけでの取り組みですが、授業が『出来る感』を感じさせる場となっているかは、他教科で観点別評価を考える上でも有効な試金石となるでしょう。人は、実際の活動の中で自分が出来たことを理解できると、次の段階の活動へのモチベーションも高まっていきます。目標を生徒が現実に到達可能な地に足のついた形で記述し、次に出来るようになる学習への指針を示すという意味で、CAN-DOリストから得られるものは少なくないはずです」

日本では英語教育の取り組みとして注目されているCAN-DOリストだが、イギリス（＊）、アメリカ、カナダといった国では、科学的探究力やリテラシーのCAN-DOリストも存在するという。学びに対する情意、態度をどのように見取り、評価していくかを考える上で、教科を超えた議論も今後ますます必要になってくるだろう。

次ページからは、観点別評価を基にした授業改善の事例として、長沼先生とCAN-DOリストなどの共同研究を行っている福岡県立香住丘高校の取り組みを見ていく。

＊イングランド及びウェールズの英国ナショナル・カリキュラムでは、全教科にわたり、義務教育課程における到達目標レベルが定められている。

学校事例

福岡県立香住丘（かすみがおか）高校 CAN-DO評価を取り入れた観点別シラバスを作成し授業を改善する

学校全体で観点別シラバスを作成

福岡県立香住丘高校には、普通科（一般コース、数理コミュニケーションコース）・英語科が設置されている。同校では、2003年度のSELHi研究指定以来、主に英語科で英語のCAN-DOリストの開発・研究を続けてきたが、13年度の新課程施行に当たり、「英語を英語で」の授業実践のために普通科の授業改善を行い、教科書をベースとした「観点別シラバス」と、生徒自身が学習状況を客観的に把握する「CAN-DOチェックリスト」の開発を行った。

本年度、同校は英語だけではなく、全教科で観点別シラバスの作成を実施した。英語では、従来実施していたCAN-DO評価と、観点別評価を組み合わせることになったが、その作業を通して感じた意義を英語科主任の永末温子（はるこ）先生は振り返る。

「以前より実施してきたCAN-DO評価と、観点別評価といった異なるタイプの評価を組み合わせることで、どのレッスンのどういった活動でそれぞれの観点を評価するかが明確になりました。CAN-DO評価は、主に『技能』『知識・理解』の評価が中心でしたが、『関心・意欲・態度』などを含め、4観点をバランス良く評価できる授業に改善していく必要もありました」

福岡県立香住丘高校
永末温子（ながすえ・はるこ）
英語教科主任。SSH推進課副課長。教職歴33年。赴任歴16年目。

福岡県立香住丘高校

◎1985年福岡県内の公立高校として最初に英語コースが設置（1994年英語科に改組）されて以来、先進的な英語教育とカリキュラム開発に取り組む。2003年度にSELHi研究指定、2011年度にSSH研究指定。
◎全日制／普通科（一般コースと数理コミュニケーションコース）、英語科／共学
◎1学年約400人
◎2013年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、筑波大、東京外国語大、九州大などに191人が合格。私立大は、東京理科大、同志社大、西南学院大、福岡大などに延べ741人が合格。

香住丘高校では全教科の観点別シラバスが前年度末には完成し、全教職員・全校生徒に配布され、年度当初からの授業で活用されている。

「新課程全面実施年度にどの教師が教壇に立ったとしても理解できる観点別シラバスを作る必要がありましたし、シラバスは生徒も活用するものなので、どのような学習目標が設定され、どのように評価がなされるかを十分に説明できるものでなければなりませんでした。教科内では『この教材を使ってどうだったか』『生徒の理解に合った教え方が出来ていたか』などと、それまでの指導を振り返りながら議論を重ね、観点別シラバスとそれに沿った年間学習指導計画を策定する作業が続きました」（永末先生）

英語科では、共同研究者である東海大准教授の長沼君主先生の助言を得て永末先生が開発した「コミュニケーション英語Ⅰ」のシラバスをモデルとして、英語科の他の科目のシラバス作成も行われた。（P.32図1）。

観点別評価を基に授業を見直す

同校の英語におけるCAN-DO評価を加えた新しい観点別シラバスでは、生徒の学習到達度を「何が出来るか」のCAN-DO形式で評価するための記述がなされた。それまでの「英文を1分間に○語読める」などのスキルを重視した能力記述の他に、「本文の流れを理解して命題となる質問に答え、さらに背景的知識も理解し、英語で答えることができる」といった、教科書ベースの授業を基本に英語で英語を理解して表現する能力を評価する記述が多く加え

られた。また、生徒が出来るようになるプロセスを認めていく姿勢も、これまで同様に重視されている。

「『出来るか、出来ないか』だけでなく、『出来つつある』ことを評価することは、『英語を英語で』教えるようになった新課程では、特に重要です。生徒は授業で『出来るようになりつつある実感』を持つことで、『やれば出来る』という自己効力を高め、積極的にコミュニケーション活動を行おうとします。『出来つつある』ことを感じさせるように活動を設計することで、次の学習へと生徒の自律的な学習態度を醸成していきます」（永末先生）

更に英語では、生徒が学習目標の達成度を自己評価できる「CAN-DOチェックリスト」も作成している（**図2**）。観点別シラバスを通して「読む・書く・聞く・話す」の4技能を整理し、学習の到達度と必要度を4段階で自己評価させる。チェックリストは、生徒にとっては自身の学習を内省し、教師にとっては生徒からのフィードバックを受けて、自分の授業を振り返ることが出来る「生徒と教師が共有する道具」となる。「シラバス、チェックリストを教科内で共有することで、新課程においても、全ての教師が同じ立場、同じ目線で生徒に接することが可能になりました」（永末先生）

新課程では教師も学び合う学習者

「英語を英語で」教える授業のスタート、「観点別シラバス」や「CAN-DOチェックリスト」の作成など、英語教育の大きな変化の中で、永末先生は「教師の同僚性」の重要性を感じている。

「『英語を英語で』教える授業については、ベテランも若手もスタートラインは同じです。だからこそ、教材研究の成果や各クラスでの活動の様子は、これまで以上に共有されています。実際、『英語を英語で』教えるようになって、より周到な教材研究を行っています。例えば、教科書の内容を深く理解できるような発問と、それに対して予想される生徒の答えを書き出した発問シナリオを作成するのですが、教科書1パートに対してシナリオが5～6ページ以上になることも珍しくありません。生徒の発話を引き出すような発問を工夫する一方、教材の内容理解を深め、考えさせたい発問をシナリオ化します。また、授業を振り返り、生徒の反応を基に次のシナリオ作りに生かしていきます。発問シナリオは、私がモデルを先行的に作成した後は、教科内でレッスンごとに担当教員を決めて作成し、学び合う環境が出来ています」

13年度に1年生が受験した7月と11月の模試の成績を比較すると、同校の英語の成績は上昇し、しかも、クラス間の成績差は非常に小さい。

図1　「観点別シラバス」サンプル（コミュニケーション英語Ⅰ）

月	単　元	学習内容	学習目標と評価の観点
前期	高校英語入門	高校での英語学習準備（春休み課題）	前期中間考査までの学習の目標・評価の観点
4月	LANDMARK Lesson 1 What Can Blood Type Tell Us?	**授業での学習のポイント** ❶**音読** 意味の区切りで読む。（チャンクリーディング・リーディングルックアップ・シャドーイング） ❷**テキスト理解** 「英語」を「英語」で理解する。	❶**コミュニケーションへの関心・意欲・態度** □科学に関する紹介文や説明文を読んで、情報や考えを積極的に理解しようとする。 □科学に関する紹介文や説明文を読んだ後で、意見を積極的に交換しようとする。 ❷**外国語表現の能力** □単語の正しい強勢、文の正しい強勢、イントネーションを理解し、教科書を音読することができる。(L1, L5) □英語で自己紹介文を書き、自己紹介スピーチを行うことができる。(L1) □グラフィックオーガナイザーに図示された情報をもとに、テキストの全体的な流れを理解し、口頭で説明できる。(L1) □グラフィックオーガナイザーに図示された情報をもとに、テキストの全体的な流れとパートごとの内容の関係を理解し、口頭で説明できる。(L5) □教科書の本文を読んだ後で、その内容について意見交換することができる。(L5) □教科書本文をパートごと読んだ後で、要約の穴埋めをすることができる。(L1, L5)
5月	LANDMARK Lesson 5 Biodiesel Adventure	❸**技能統合活動** 読んだり、聞いたりした内容を話したり、書いたりする活動につなげていく。教科書の英文の内容を基本に発展的な自己表現活動を行う。 ❹**速読演習** 英文を速く正確に、英語で理解するスキル演習を行う。	❸**外国語理解の能力** □教科書本文を読んで、本文の流れを理解して命題となる質問に英語で答えることができる。(L1, L5) □クラスメートが行う自己紹介の内容を理解することができる。(L1) □意見交換において、クラスメートの意見を理解することができる。(L5) □教科書本文に関連した英文を読み、パラグラフの中の文と文のつながりを理解し、全体の流れもある程度理解で
6月	前期中間考査 Lesson 4	❺**補充リーディング** 教科書の本文の内容に関連する英文読解を行	

＊Copyright@2013 Naoyuki Naganuma〈n.naganuma@tokai-u.jp〉& Haruko Nagasue〈HarukoNagasue@aol.com〉
＊英語での年間指導計画と単元計画へのCAN-DOリストの反映例については、『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』（文部科学省初等中等教育局）も参照のこと。（http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1332306.htm）

図1「観点別シラバス」サンプルの完全版は、次のURLよりダウンロード可能です。
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/kou/dwdata/201402/shinkatei_1.pdf

加えて、上位層の人数は過去3年間で一番多いという。

内容を深く、自発的に理解する生徒たち

観点別評価を踏まえて授業設計を変えたことで、普通科の授業の様子は随分変わったと永末先生は話す。

「屋久島のエコツアーを扱った単元では、本文の背景的知識を理解させるための教材研究を行い、発問シナリオを作成しました。生物の先生から内容の深め方や生徒の理解度についてアドバイスを受け、実際の授業では、屋久島の地理的特徴や降雨量などの教科書の内容にとどまらず、生物の垂直分布にも触れ、生徒の科学的探究心を高めるようにしました。同時に、得た情報を使って地域比較を行う活動で、分数や倍数表現に親しむなど、言語に対する知識・理解も深まりました」

教科書を軸にしながらも、時には教科書のレベルを超えた内容を学んでいったが、内容が教科書で扱われているテーマと密接に結び付いているため、生徒は一貫して興味を持って学ぶことができ、高いレベルの学習内容でも意欲的に理解していこうとしていたと永末先生は説明する。

「『英語を英語で』の授業に慣れるにつれて、教師の英語での指示や説明への理解度は格段に高まり、要約や意見発表等のアウトプット活動に積極的に取り組んでいます。動画投稿サイトなどでテーマに関連する動画を見たり、参考文献を読んだりと、自発的に学習に取り組む生徒が増えました。『英語で他教科の内容を学ぶ』授業展開が、言語学習そのものの意欲を高めることにつながっていると感じます」

観点別評価とCAN-DO評価によって包括的に評価できるだけでなく、実現可能な到達度の学習目標を設定し、実際に生徒が目標を達成できるような授業を同校は展開している。「誰のために評価するのか」を見据えて、評価できる授業設計を行い、評価結果から授業を柔軟に改善することが、新課程ではどの教科にも求められていると言えるだろう。

図2 「CAN-DO チェックリスト」サンプル（1年普通科〔数理コミュニケーションコース〕）

Self-Assessment Checklist　GRADE 1【1年前期】

Can-Do できる度チェック	4: I can do this easily.（余裕を持ってできる） 3: I can do this under normal circumstances.（通常であればできる） 2: I can do this with difficulty.（難しいけれどもできる） 1: I cannot do this.（難しくてできない）
Needs やりたい度チェック	4: I can do this, but I want to do this more.（できるけど、もっとやりたい） 3: I can do this, so I don't want to do this.（できるから、やらなくてよい） 2: I can't do this, but I don't want to do this.（できないけど、やりたくない） 1: I cannot do this, so I want to do this.（できないから、やりたい）

外国語表現の能力			Can-Do 1〜4	Needs 1〜4
SPEAKING				
S11	コミュⅠ R11L11技能統合 S21基礎	コミュニケーション英語Ⅰの教科書LANDMARK English Communication Ⅰの英文を読んだ後に、本文の流れを理解して命題となる質問に英語で答え、さらに背景的事実も理解して英語で答えることができる。		
S12	英表Ⅰ W11L12技能統合	80語程度の簡単な表現で書いた自己紹介スピーチを1分程度行うことができ、スピーチの内容に関する簡単な質問に答えることができる。		
S13	英表Ⅰ	会話において、自分のこと（興味・趣味・好きなこと・嫌いなこと・まわりの出来事・学校生活）や自分の家族のことを簡単な表現でやりとりすることができる。		
S14	コミュⅠ W12技能統合	コミュニケーション英語Ⅰの教科書LANDMARK English Communication Ⅰの英文を読んだ後に、血液型と人のパーソナリティーの関係等、そのレッスンのテーマに対する自分の意見を明確にして、その理由や具体例を示しながら述べることができる。		
S15	コミュⅠ W13技能統合 S25共通	コミュニケーション英語Ⅰの教科書LANDMARK English Communication Ⅰの英文を読んだ後に、Graphic Summary Chartに図示された情報をもとに、テキストの全体的な流れとパートごとの関係を理解し、口頭で説明することができる。		
WRITING				
W11	英表Ⅰ S12技能統合	1分程度の自己紹介を行うために80語程度のスピーチを簡単な表現で書くことができる。		
W12	コミュⅠ S14技能統合	コミュニケーション英語Ⅰの教科書LANDMARK English Communication Ⅰの英文を読んだ後に、血液型と人のパーソナリティーの関係等、そのレッスンのテーマに対する自分の意見を明確にして、その理由や具体例を示す英文を80語程度で書くことができる。		
W13	コミュⅠ S15技能統合 W23共通	コミュニケーション英語Ⅰの教科書LANDMARK English Communication Ⅰの英文を読んだ後に、Graphic Summary Chartに図示された情報をもとに、テキストの全体的な流れとパートごとの関係を説明する英文を書くことができる。		
W14	コミュⅠ	コミュニケーション英語Ⅰの教科書LANDMARK English Communication Ⅰの英文を読んだ後に、本文の内容を踏まえながら自分が実行したいEco-Friendly 活動について、具体例を示しながら60語程度の英文を書くことができる。		
W15	コミュⅠ W25基礎	コミュニケーション英語Ⅰの教科書LANDMARK English Communication Ⅰの英文を読んだ後に、本文の内容を踏まえながら、絶滅危惧種に関する現状と絶滅危惧種を救うための自分の意見を表す150語程度の英文を書くことができる。		
外国語理解の能力			Can-Do 1〜4	Needs 1〜4
READING				
	コミュⅠ	コミュニケーション英語Ⅰの教科書LANDMARK English Communication Ⅰの英文を読んだ後に、本文		

＊Copyright@2013 Naoyuki Naganuma〈n.naganuma@tokai-u.jp〉& Haruko Nagasue〈HarukoNagasue@aol.com〉

図2「CAN-DO チェックリスト」サンプルの完全版は、次の URL よりダウンロード可能です。
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/kou/dwdata/201402/shinkatei_2.pdf

鳥取県立
倉吉東高校

組織力向上

分掌数削減、副担任廃止 組織改編を断行し 協働性・同僚性を喚起

◎1909年に鳥取県立倉吉中学校として開校。2001年、中長期ビジョン「倉吉東高のかたち」を策定。「主体的学習者の育成」「21世紀をリードする人材の育成」を教育目標に、「国際高校生フォーラム」や「チューター制度」などの特色あふれる取り組みを推進。

設立
1909（明治42）年

形態
全日制・定時制／普通科／共学

生徒数
1学年約200人

13年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、鳥取大、島根大、岡山大、九州大、兵庫県立大、鳥取環境大などに198人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ193人が合格。

住所
〒682-0812
鳥取県倉吉市下田中町801

電話
0858-22-5205

Web Site
http://www.torikyo.ed.jp/kurae-h/

変革のステップ

背景
◎学級減に伴う教員定数の削減、新課程に向けた教育課程の再編などの諸課題が「2013年度問題」として浮上
STEP 1

実践
◎校務分掌を8から4に削減。副担任を廃止し、担任と分掌業務を切り離す。新課程には授業時間数を増やさずに対応
STEP 2

成果
◎分掌再編に伴う混乱を乗り越え、教師の協働性・同僚性が高まり、組織が成熟化しつつある
STEP 3

少子化による学級減のため3年間で教員数の約2割が減少

主体的に学びに向かう生徒の減少、生徒の学力の多層化、家庭学習時間の低下……。生徒の気質や学習観・進路観の変化に対応しようと、鳥取県立倉吉東高校が人材育成のグランドデザイン「倉吉東高のかたち」を策定したのは2001年のこと。「主体的学習者の育成」および「21世紀をリードする人材の育成」を教育目標として、上級生が1年生を支援する「チューター制度」、教師が自ら学びの体験を紹介する冊子「学びの復権」、全国の進学校の生徒を招いて社会の諸問題についてプレゼンテーションを行う「国際高校生フォーラム」などの取り組みは、本誌08年9月号の特集で紹介した。

その同校が新たな問題に直面した。数年前から「13年度問題」が浮上したのだ。13年度は、新課程が完全実施となるのに加え、11年度に始まった6学級から5学級への学級減が完成する年。他にも、卒業生の大学進学を支援する専攻科の廃止や耐震工事の開始など、さまざまな外部要因がこの年に集中していたため、「13年度問題」と呼ばれるようになった。

中でも課題だったのが、学級減に伴う教員定数の削減だ。11年度から3年間で約10人（約2割）、教員数が減少した。もちろん、教員数が減ったからといって、すぐに部活動や行事を縮

小するわけにはいかない。毎年開催する「国際高校生フォーラム」も質を維持するために担当者は減らせない。あらゆる取り組みにおいて、教員の手当てをどのように行うかが喫緊の課題だった。牧尚志（ひさし）校長は次のように述べる。

「特に大きな課題は分掌業務でした。分掌数を維持するならば、各分掌から一定割合で人員を削減するしかありません。しかし、それでは分掌のパワーが低下し、生徒や保護者に提供できるものがそれだけ縮小することを意味します。担任と分掌の関係も含めて、抜本的に学校組織を見直す必要がありました」

鳥取県立倉吉東高校校長
牧 尚志 まき・ひさし
教職歴36年。同校に赴任して4年目。「主体的学習者、21世紀をリードする人材を育成したい」

鳥取県立倉吉東高校副校長
河田雅志 かわた・まさし
教職歴27年。同校に赴任して2年目。「生徒が次の段階に向かえるだけの力を知らず知らずのうちに身に付けられるような指導をしていきたい」

鳥取県立倉吉東高校
福光 浩 ふくみつ・ひろし
教職歴26年。同校に赴任して4年目。キャリア形成部長。「生徒を先導し、後押しし、伴走しながら、最後は自分の力でゴールさせたい」

鳥取県立倉吉東高校
木村彰志 きむら・しょうじ
教職歴17年。同校に赴任して9年目。1学年主任・担任。化学担当。「生徒は自分を映す鏡。全てが反映されると肝に銘じて向き合っていきたい」

8分掌を4分掌に改編し、時代に対応した組織へ

教員数減という課題を前に、同校が行ったのは分掌再編だ。学校の将来を考えようとする志を持った教員（主に希望者）によって構成される「ビジョン委員会」で話し合い、12年度、教務部、進路部など従来の8分掌を再編し、「企画推進部」「キャリア形成部」「活動創成部」「連携発信部」の4分掌とした（図）。

図　分掌の新旧対照図

旧分掌	新分掌	
教務部	キャリア形成部	各種テストの実施・分析、生徒・保護者への進路説明会、図書館の運営、読書・小論文活動の推進、人権教育の企画・運営など
進路部		
生徒会部	活動創成部	生徒会リーダーの指導、学園祭の充実、部活動の育成、環境保健教育の推進、防災教育の充実、生活秩序の維持・啓発など
保健部		
図書部	企画推進部	学力向上・職員研修、学校行事・教育課程・クラス編成等、定期考査・時間割変更等、教科書採択・奨学金事務・各種印刷物作成など
人権教育部		
総務部	連携発信部	同窓会運営業務、ＰＴＡ業務、中高連携事業、国際理解教育、広報活動、年間誌『鴨水』など
研修部		

＊学校資料を基に編集部で作成

「学校に求められる役割は、十数年前とは大きく変わっています。教員研修の内容を見ても、コンプライアンスやクレーム対応、不審者対策など、従来の縦割りの分掌組織では対応が難しい課題ばかりです。個々の活動の位置付けを見直し、分掌の考え方を抜本的に変えることで、時代の変化に対応した組織をつくろうと考えました」（牧校長）

「企画推進部」は、学校のかじ取り役ともいえる部署で、教育課程や行事の企画、教員研修などを主管する。「キャリア形成部」は、従来の進路部の機能に加え、図書館の運営、小論文指導、チューター制度の運営、人権教育の企画・運営などを担当。「活動創成部」は生徒指導を主に担う。生活面だけでなく、学園祭や「国際高校生フォーラム」の実施、部活動の育成、応援団の指導など、生徒の主体性を育む活動を推進する。「連携発信部」は、広報活動を主に行う部署で、学校案内の作成やウェブサイトの管理などの広報活動から、同窓会運営や中高連携事業、国際理解教育までを手掛ける。

分掌再編に伴い、担任の位置付けも見直した。以前は、全教員が分掌に所属して担任・副担任のいずれかを務めていたが、12年度、担任業務と分掌組織を切り離し、学級担任は分掌に所属させないことにした。学年主任は担任を兼務し、副担任は置かない。担任は分掌業務を担当しない代わりに、学級経営はもちろん、学年経営に

ついても責任を持ち、学年全体を見る視点を持ってもらうのが、狙いの1つだった。

再編で問われた教師の協働性・同僚性

更に、牧校長は、分掌再編の狙いとして、教師の協働性や同僚性の高まりを挙げる。

「教員数が減る以上、自分の仕事の領域を超えて気遣い、助け合うことが必要です。自分の手が空いている時は隣の部署を手伝う、学級担任が学年全体のことを考えて学年主任をサポートする。教員一人ひとりがそうした気配りが出来るようになれば、学校組織は今以上に強くなり、新たな課題が生じた時の対応力も高まると期待しています」

しかし、現場は衝突の連続だった。業務範囲があいまいなままスタートした分掌が多く、分掌内でも「それはここの仕事ではない」「それは学年団がやること」といった声が上がり、分掌内や分掌・学年間でさまざまな摩擦が生じた。学年団でも従来の考え方から抜け出せず、「生徒には副担任が必要」「学年主任は担任から外してほしい」という声も少なくなかった。

「人の仕事には手を出したくない、自分の役割はなるべく小さくしたい。分掌再編では、そうした縦割り主義を乗り越えられるかどうかが問われました。結果として、協働性や同僚性が低いことが明確になりました。しかし、それで良かったと思っています。自分の力の無さを自覚するところから成長が始まるのは、教師も生徒も同じです。課題意識を明確にし、それを乗り越える努力をすることによって、教員一人ひとりが成長し、学校組織もより強く、しなやかになっていくのだと思います」（牧校長）

実際、2年目の13年度は、分掌間・教員間の行き違いや摩擦が大幅に減り、仕事がスムーズに進むようになった。キャリア形成部長の福光浩先生は次のように話す。

「昨年、準備が遅れた部署では、今年は先を見越して早めに動き出していました。また、昨年は自分たちが助けてもらったから、今年は力になろうと思われている先生が増えたと思います。また、不定期ながら、副校長が各分掌の部長と学年主任の7人を集めて、課題を話し合う会議を持ったのも大きかったと思います。他の分掌と協調しながら主体的に動ける先生方が増え、組織として少しずつ成熟していると感じます」

「やせ我慢」をしてでも学校として守るべきもの

「13年度問題」のもう1つの大きな課題は、新課程のカリキュラム編成だった。教育課程を組むに当たり、牧校長が掲げた方針は「受験に必要な科目だけを優先しない」ことだ。体育や芸術科目を重視する姿勢は、同校が数十年来守ってきた基本方針の1つである。数学や理科など、科目数や内容の増加により大幅に時間数が不足する教科もあるが、そのために7・8時間目を設けたり、他教科の授業や行事を削減したりする方法は取らない。ただし、それによって進学実績が下がることがないよう、受験学力も確実に保証する。

その結果、新たなカリキュラムでは、授業時間数を維持したまま、科目数や内容の増加分を吸収することとなった。体育や芸術科目も、学習指導要領が定める最低単位より1単位多く設定していたが、それも減らさなかった。

「理数科目の変化に対応するために、部活動や行事を削減した学校もあったはずです。しかし、生徒に『受験学力だけではない教養が大事』と言いながら受験重視のカリキュラムにしては、生徒の信頼は得られません。やせ我慢をしてでも学校として守るべきところは守るという方針を徹底しました」（牧校長）

全校体制の研修を組み アクティブラーニングを実践

学力向上にもつながる主体的な学習姿勢を身に付けさせるために、同校が新課程で導入した

のが、ゲスト・ティーチャー制度だ。1年生の「世界史A」で、他教科の教師が乗り入れて授業を行うというもの。例えば、中国史では国語担当の教師が漢詩文を取り上げ、ルネッサンスでは美術担当の教師が解説を行うなど、それぞれの教科の切り口から世界史にアプローチする。英語担当の河田雅志副校長は次のように語る。

「私はアメリカ黒人史の授業でキング牧師の演説を引用し、英語と世界史の融合を試みました。この取り組みのキーワードは『教養の窓を開こう』です。世界史という科目を通して、教養の広がりや大切さを実感させることが狙いです。本当の教養は裾野の広いものであり、教科を超えた学びのつながりが、各教科の学力向上にも結び付くと感じてほしいと思っています」

新課程でのもう1つの取り組みが、アクティブラーニングの実践だ。12年度から2年間掛けて全教科で研究授業を実施。全国の先進校から講師を招き、講師の示範授業と同校教師の研究授業を行い、事後に改善点などのアドバイスをもらった。更に、理論研修として、各教科に共通する汎用的スキルも学ぶ。年1回、外部講師を招いて講義を受け、更に、県の研修を受けた教員が職員会議でその内容を伝える。

化学担当で1学年主任の木村彰志先生も、自身の授業にアクティブラーニングを取り入れている。5分で問題を解かせて、分からない点を3分間、周りの生徒と相談させるという方法だ。難易度の高い問題の場合は4人1組にして話し合わせることもある。

「知識事項の解説は講義形式の方が効率的ですが、知識を活用して解く問題などでは、周りの生徒と相談しながら考える方が思考を組み立てる上で効果的だと思います。他教科でも実施しているため、グループでの話し合いもスムーズにでき、学校全体で取り組むことで相乗効果が生まれているのも感じます」

「13年度問題」を真正面から受け止め、組織改革に取り組んできた倉吉東高校。今後の課題は、今ある取り組みを整理して教員の多忙感を解消することと、牧校長は話す。

「取り組みは何をするのかという『What』が大事ですが、同様に『How』や『Why』も大切です。それを行う理由や手法も常に考えながら、受け継ぐべきものは受け継ぎ、整理すべきものは整理することが、これからますます重要になると思います。その際に必要なのは、じっくり計画を練り、意識共有を図りながら着実に前進していくことです。最初は摩擦が起きたとしても、5年後、10年後には『あの時にこれを選択して良かった』と思えるようになるはずです。学校経営とは、問題を認識したならば、それを回避したり、先送りしたりすることのない真の勇気を束ねていくことに他ならないのではないでしょうか」

若手教師が語る、指導変革への情熱

新しい教育観を持った若手教師を育てたい

1学年主任・担任 **木村彰志**

学年主任は4年目になります。初めて学年主任となった2010年度、分掌再編について話し合うビジョン委員会の委員になりました。私の役割は、管理職や主任に現場の状況を伝えること。「これを行うと、生徒はどう動くか、教師はどう考えるか、そして、自分ならどうするか」をイメージし、実現の可能性について自分の考えを述べました。

私は分掌と担任を分ける案には賛成でしたが、副担任の廃止には不安を感じていました。会議では、学年主任を担任業務から切り離し、全学級の副担任として担任をサポートする案を出しましたが、教員数が足りない現状では不可能と結論付けられて採用されませんでした。教師同士が助け合い、学年団としてまとまりを持って動かなければ、教員定数減という難局を乗り越えることは出来ないことを痛感しました。

どのような取り組みをするにせよ、忘れてはならないのは、生徒にとって何が最も良いのかということです。今ある教育資源を生かして、生徒の力を高めるためには何が出来るのか、これからも全力で考えていくつもりです。また、今後は40代の中堅として、若手教師の育成も心掛けていきたいと思っています。私が感じていることを若手の先生に伝え、若い感覚と擦り合わせてもらう。そうした中から新しい教育観を持った先生方が育ってくれれば、本校は更に活性化していくのではないかと期待しています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2011年9月号指導変革の軌跡「北海道函館稜北高校」など
▶▶▶ http://berd.benesse.jp → HOME > 教育情報 > 高校向け

茨城県・私立
茗溪（めいけい）学園中学・高校

課題研究

自分でテーマを決めた課題研究で限界に挑戦し達成感、進路意識を高める

◎一般社団法人茗溪会により創設された中高一貫校。筑波研究学園都市の立地を生かした課題研究や留学生受け入れに力を入れ、2011年度にはスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けた。全国大会優勝経験のあるラグビー部の他、剣道、テニスなど全国レベルの部が多い。

設立
1979（昭和54）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約250人

13年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、千葉大、東京大、一橋大、お茶の水女子大などに63人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ690人が合格。

住所
〒305-8502
茨城県つくば市稲荷前1-1

電話
029-851-6611

Web Site
http://www.meikei.ac.jp/

変革のステップ

背景
◎海外で力を発揮できない日本人研究者が多いとの課題から、「世界的日本人」の育成を目標として学校を創立
STEP 1

実践
◎「世界的日本人」に必要な Study Skills の習得とその集大成である個人課題研究を35年間継続。2012年度には探究講座を新設
STEP 2

成果
◎テーマ設定や研究開始がよりスムーズに。生徒は課題研究を通して、進路意識が明確になるだけでなく、卒業後も生きる知見を得ている
STEP 3

目標は世界と渡り合える「世界的日本人」の育成

国内最大級の研究拠点・筑波研究学園都市の一角にある茗溪（めいけい）学園中学・高校は、東京高等師範学校、東京文理科大、東京教育大、筑波大などの同窓会である一般社団法人茗溪会によって、知育偏重と批判を受けていた当時の中等教育のあり方を世に問う学校として開校した。以来、35年以上にわたり、考える力と行動する力の育成を重視した教育活動を展開している。田代淳一教頭は創立の背景を次のように語る。

「創立目的は、海外で活躍できる『世界的日本人』の育成です。当時、日本人研究者の課題だったのがディスカッション力の不足でした。海外の研究者と渡り合うためには、自分で課題を見付け、その解決のための情報を集めるなど、自分で研究をコーディネートする力が必要です。しかし、国内で高い学力を持つ学生も、海外では自分の意見を言えず、ディスカッションなどで後れを取ることが少なくありませんでした。筆記試験だけでは測れない『自ら考え行動する力』を6年間でいかに伸ばすかが、本校に課せられた使命でした」

その使命を果たすために、創立以来重視するのが「Study Skills」の育成だ。同校が考える Study Skills は「自ら学び・成長していく能力」の基礎となるもので、「知識・経験・体力・創造性・

国際性・ＩＣＴ」の６つと捉えている。これらの習得のため、中学校段階からグループによる課題解決型学習やフィールドワークなど教科横断型の活動を多く設けているのが特色だ。

そうした活動の集大成が、創立以来の伝統である２年生での「個人課題研究」だ。生徒が、自分で関心のあるテーマを設定し、そのテーマについて１年間研究して、最終的に論文にまとめる。研究テーマは、平安女流文学、アレルギー、クローン技術、食糧問題、テレビ広告など、科学、人文・社会科学、医療、メディア、芸術と幅広い。１年間掛けて、小説の執筆や洋書の翻訳、絵画・マンガの制作を行う生徒もいる。

茗渓学園中学・高校教頭
田代淳一 たしろ・じゅんいち
教職歴30年。同校に赴任して25年目。「生徒が考えていることを感じとる感性を磨いていたい」

茗渓学園中学・高校
大貫和則 おおぬき・かずのり
教職歴22年。同校に赴任して23年目。情報科主任。SSH推進委員。「社会とのつながりを意識した学びを組み立てるように心掛けている」

茗渓学園中学・高校
中村泰輔 なかむら・たいすけ
教職歴13年。同校に赴任して10年目。SSH推進委員長。理科主任。「『真心を尽くす』ことを大事にして、職務に当たっていきたい」

茗渓学園中学・高校
三島侑子 みしま・ゆうこ
教職歴5年。同校に赴任して2年目。司書。情報科。SSH推進委員。「毎日の生活で『知る楽しみ』を感じてもらえるよう努力していきたい」

「プロポーザルシート」で指導教員にアピール

個人課題研究の流れは**図1**の通り。序盤の山場は、研究テーマと指導教員（課題指導者）の決定だ。生徒は「プロポーザルシート」（**P.40 図2**）に、研究テーマ、その選択理由、目的、方法、そして進路を考えるきっかけにするために希望進路を記入し、テーマに最も関連しそうな教科にシートを提出する。

次に、研究テーマを精緻化するため、研究相談会を３回行い、教科担当教員が助言する。テーマの中には、調べたらすぐに結論が出るようなもの、逆に壮大すぎて結論までたどり着けないものもある。そのような場合、「こういう実験をしてみたらどう？」などと、教師がヒントを出しながら、より質の高い実践可能な研究になるよう導く。最先端のテーマであれば、実験機器がそろえられないこともある。そうした場合でも、テーマを変えさせるのではなく、限られた設備で出来ることを生徒は教師と一緒に考える。SSH推進委員長の中村泰輔先生は言う。

「例えば、災害救助用のロボットを作りたいといっても、生徒の力量はもちろん、設備面でもそれに対応するのは難しい。ならば、センサーなどロボットの一部を研究対象にする、あるいは災害で救助された経験のある人にインタビューをし、ロボットの活用を社会的な面から考察するというように、研究の基盤になる部分に着目させています。テーマが研究可能なものとなるよう、的確にアドバイスする力量が教師には求められます」

研究テーマが決まれば、次は指導教員を決めることになる。生徒は希望する教師にプロポーザルシートを提出して審査を受けるが、１回で了承されることはほとんどないという。テーマや研究手法などの詰めが甘ければ何度でも書き直しを求められる。また、テーマと教科の関連性が薄い場合は、他教科に行くよう指示を受ける。テーマ決定が遅れたため、希望する指導教

図1　個人課題研究の進め方

1年生	探究講座で勉強したことを踏まえテーマを考え、先行研究、研究方法を調査	秋頃まで
	プロポーザルシートを提出	1回目 11月中旬
	シートを基に研究相談会を実施	11月2回、12月1回
	先生を訪問して課題指導者を探す	12～1月
	テーマ・課題指導者確認表を提出	1月末まで
	研究計画カード・本文の1章を提出	3月上旬まで
2年生	中間報告書提出・中間発表	6月頃
	下書き提出	10月頃
	レポート・要旨提出	12月上旬
	発表用の資料を作成	12月中旬
	個人課題研究発表会	12月下旬

＊学校資料を基に編集部で作成

員の定員が埋まり途方に暮れる生徒、内容の不備により何度もシートを突き返され泣き出す生徒もいるという。同校の卒業生である三島侑子（ゆうこ）先生は、そうした挫折も成長の糧になると話す。

「私も最初に申し込んだ先生に断られました。挫折をしてこそ身に付く打たれ強さも、社会を生きていく上で大切な力です。やりたいことをするためにはきちんと筋を通さなければいけない、課題は自分で解決しないといけないことを学びました」

図2　「プロポーザルシート」

「第1回・第2回・第3回」提出

プロポーザルシート

年　組　番　氏名

教科：＿＿＿＿科

テーマ：

アドバイスメモ欄

研究動機

研究目的（研究のゴール）

研究方法

印

進学を希望する分野（学部・学科）

第一希望：＿＿＿＿分野（＿＿＿＿学部＿＿＿＿学科）

第二希望：＿＿＿＿分野（＿＿＿＿学部＿＿＿＿学科）

第三希望：＿＿＿＿分野（＿＿＿＿学部＿＿＿＿学科）

＊学校資料をそのまま掲載

「限界を超える」研究で達成感を味わわせる

テーマと指導教員が決まると研究が始まる。課題研究の時間は毎週土曜の3～5時限だが、それだけで研究が完成することはない。放課後や部活動の合間など、時間を見付けてコツコツ進めていく。放課後に自転車で研究機関を訪ねてヒアリングをし、更に学校に戻って研究の続きをする生徒もいる。

指導教員は校長も含む全教員が担当する。指導方法は、担当する生徒数に応じて異なる。個別指導が難しい場合は、ゼミ形式を取ることが多い。30人近い生徒を受け持つ田代教頭は、生徒に1人3分で進捗を発表させ、質疑応答を入れながら議論し、最後に田代教頭が全員にコメントをする。

研究の過程では、生徒を妥協させず、いかに研究内容を深めさせるかが、指導教員の腕の見せ所となる。例えば、実験を1つして「結論が出た」と安心している生徒には、実験内容を振り返り、「もう1つ実験をして、別の側面から分析したらもっと良い結果が出るかもしれない」などと声を掛ける。生徒は自分の努力不足に気付き、それが視野を広げることにつながる。

「研究にゴールはありません。妥協すればそれで終わりですし、逆に努力次第でいくらでも質を高められます。研究の切り口はたくさんあると、生徒に理解させることも課題研究の狙いの1つです。生徒が考える限界を少しでも超えられるように支援し、やり遂げたという達成感を得てほしいです」（中村先生）

研究成果は年内に論文にまとめ、協力を得た研究機関などに送付する。そして、2年生3学期に筑波大の協力の下、30～40人の生徒が分野ごとに7会場に分かれ研究発表を行う。筑波大の教員が各分野の座長を務めるが、「大学院生並みの論文」と賞賛されることもあるという。

自分の研究に必要なものは何か選択する力を身に付ける

12年度には、課題研究の事前学習として、1年生で「探究講座」を始めた。各学問の基礎知識や基本的な研究手法を教える講座だ。従来は、1年生の情報の授業で発想法の指導と併せて研究テーマを考えさせたり、職業人講話で職業観を養ったりして、生徒が自身の関心に気付くように働き掛けていた。ただ、それでは十分なテーマ探索や研究手法が身に付かないと考え、学問や研究の魅力を伝える講座を開くことにした。

探究講座は週1時間。医学以外は全て同校の教員が講座を受け持つ。各分野1コマのガイダンスを最大4コマ履修して概要を把握し、それを基に3コマ1セットの講座を最大3講座選ぶ。内容は、教育学、国際協力、企業経営など研究分野にかかわる講座、社会調査法やコンテンツ分析法など研究手法を解説する講座がある。SSH推進委員の大貫和則先生はこう話す。

「心理学のように、生徒にとって未知の分

野は学問の基礎知識を教えますが、文学や理系分野については、研究する際の視点や研究の具体的な進め方・手法などがテーマになります。取りこぼしがないように、例えば、心理学を研究テーマにしたい生徒には社会調査法を履修するように呼び掛けますが、必須にはしていません。あくまでも、生徒に自分の研究に必要なものは何かを自分で考え、選択させるようにしています」

「自分に合わない」と悟るのも重要な発見

個人課題研究の最大の成果は、生徒の進路意識がより明確になることだ。研究を通して、志望への意欲を高める生徒がいる一方、「自分に向かない」と進路を変える生徒も少なくない。

「私の実感では、約3割の生徒が課題研究を通してその分野に適性がないと悟り、志望を変更します。もちろん、それで良いと私たちは言っています。課題研究の目標は、立派な研究論文を完成させることではありません。自分の将来にかかわるかもしれないテーマを学術的・体験的に考えることが大切であり、『自分に合わない』ことが分かるのも重要な発見なのです」（田代教頭）

三島先生も、研究テーマは立体映像だったが、大学進学後は司書資格を取り、現在は情報科教員兼司書として勤務している。「進路には直接結び付かなかったが、課題研究での経験は、その後も役に立った」と三島先生は振り返る。

「メリットの1つは、大学の卒論で、周囲が初めての論文に戸惑っている時に、私は順調に研究を進められたことです。また、立体映像の知識は情報の教科を教えることに役立っています。実際の進路とは違うテーマであったとしても、課題研究で追究した努力は後々必ず生きることを、生徒に伝えています」

今後は、「中高一貫校のメリットを生かしたい」と大貫先生は語る。

「探究講座を設けたことで、事前に論文検索の手法などを学ばせることができ、2年生からの研究が格段にスムーズになりました。今後は中学校段階でも『ミニ課題研究』のような取り組みを行い、生徒の探究力を高めることで、よりレベルの高い研究に到達できるよう後押ししていきたいと考えています」

もう1つの課題は、SSHにふさわしい成果を上げていくことだと、田代教頭は話す。

「課題研究を2年生で行うのは、進路意識の醸成や学習へのモチベーションの継続の面で絶好のタイミングです。ただ、期間が限られるため、一度失敗するとやり直しがきかない研究もあります。生徒が短期間で深い学びに到達し、高い研究スキルを身に付けられるように、今後も工夫を重ねていきます」

若手教師が語る、指導変革への情熱

教師個々における日々の授業改善と学校全体としての一体感が大切

SSH推進委員長・理科主任 **中村泰輔**

個人課題研究の指導教員として留意しているのは、生徒を元気付けながら、いかに一定の成果を上げさせるかです。教師が手を出し過ぎるのも良くないですし、全く手を出さないのもいけない。その加減をどうするのか、試行錯誤の連続です。そうした過程において、理科の授業で、私はどれだけのものを生徒に提供できているのかと考えるようになりました。実験結果をグラフや表にまとめたり、考えたことを表現したりする活動を普段からしていなければ、学術的に認められる論文は書けません。教師が日々の授業を改善し、中学校も含めて段階的に指導していくことが大切です。

2年前、SSHの推進委員長に任命されました。委員長としては、SSHを学校全体の取り組みにすることを意識しています。当初、先生の中にはSSHを「理系の取り組み」「成績上位層向け」と考える方もいました。そのような方には、本校は個人課題研究を全員に課してきた学校であり、文理を問わない力の育成は本校の教育理念であると説明し、一体感を持って取り組んでいただけるように努めています。独断で物事を進めない配慮も大切です。新しい取り組みをする時は、職員会議などを通して適切に周知させ、学校全体で合意できるように丁寧に進めています。SSHは中高6年間の全ての教育課程にかかわる改革であり、私にとっても大きな挑戦です。生徒の変容を見ながら、一歩一歩、着実に取り組んでいきたいと思います。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2013年2月号指導変革の軌跡「大阪府・私立関西大学高等部」など
▶▶▶ http://berd.benesse.jp → HOME > 教育情報 > 高校向け

「もっと響く指導」にするために！

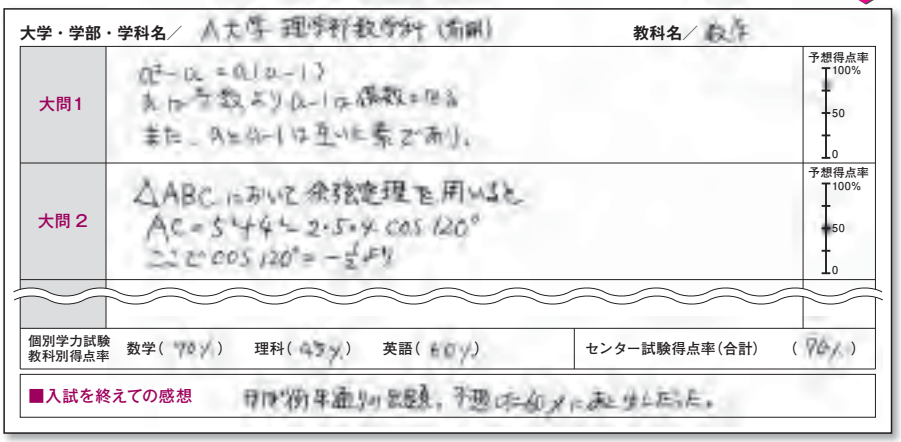
生きたデータの徹底研究

「データ」を活用して客観的に生徒の状況を捉え、指導の方針を整理する方策を伝えてきた「生きたデータの徹底活用」。さらに響く指導を実現するために、現場の先生方と改めて指導のポイントを確認し、「データ」の改良を検討します。

テーマ 次年度につながる3年生指導の仕上げ方

「生きたデータ」2013年２月号を参考に、再現答案作成に取り組んだところ……

図1 3年生が作成する再現答案　ダウンロード



大学・学部・学科名／ A大学 理学部数学科（前期）　教科名／ 数学

		予想得点率
大問1	$a^2-a=a(a-1)$ aは奇数より$a-1$は偶数になる また、aと$a-1$は互いに素であり、	100% 50 0
大問2	△ABCにおいて余弦定理を用いると $AC=5^2+4^2-2\cdot5\cdot4\cos120^\circ$ ここで$\cos120^\circ=-\frac{1}{2}$より	100% 50 0

個別学力試験教科別得点率　数学（70%）　理科（45%）　英語（60%）　センター試験得点率（合計）（70%）

■入試を終えての感想　例年通りの問題。予想に近くに近い出だった。

私の狙い	取り組み内容	感じた課題
３年生が作成した再現答案で教師、生徒がリアルな合格者像を共有したかった	３年生の協力を得て、合否にかかわらず、多くの生徒の再現答案をそろえた	生徒に手間を掛けさせた割には、教師が分析に十分に生かせなかった。また生徒にとっての活用方法も不明瞭だった

「もっと響く指導」のポイント ①

再現答案で指導の総括を行い、次年度の生徒、教師に引き継ぐ

今年度、初めて３年生を担任しているのですが、本校では毎年３年生に再現答案を作成してもらっています。実は前任校でも再現答案作成に取り組んだことがありましたが、周囲からの「受験のリアリティーを感じさせるだけの資料に、手間を掛けすぎではないか」という声が大きく、取り組みは長続きしませんでした。M先生の学校では、再現答案のメリットをどのように位置付けて取り組んでいるのでしょうか。

まず、教師のメリットとしては、再現答案の採点を通して、それまでの指導を振り返りながら教科指導力を高めるチャンスを得られることです。次に、次年度以降に受験する生徒のメリットとしては、身近な存在である先輩が入試本番で作成した合格答案をリアルに見ることで、どうすれば自分に合格答案を作成する力を付けられるのか、１年後の入試から逆算して計画を立てるきっかけになることです。

再現答案は、「合格者はどれくらい書けたか」を確認するだけではなく、むしろ偏差値だけに頼らない学力把握の機会と言えそうですね。

そう思います。「合格答案作成のための学力の土台が、２年生の学習内容にあった」などと気が付き、気持ちを引き締めるのは生徒だけではありません。本校でも、平素の指導の的確さが、入試本番の厳しい採点に耐え得る力を付けるということを認識する若手の先生は増えてきました。

※このコーナーは、高校の先生方（今回は中国・四国地方）との検討会の内容を基に構成しています。

中堅先生代表

S先生（40代）　四国地方の公立高校勤務。13年度は３学年担任。進路部所属。

M先生（40代）　中国地方の公立高校勤務。13年度は３学年の学年主任。

再現答案は確かに見るだけでも迫力があるのですが、それを生徒、教師がどう役立てるかが明確になっていませんでした。「これだけ書けたのか！」「すごい！」という感想を持つレベルからもう一歩進み、生徒の学習計画の見直しや、教師自身の指導の改善などにつなげたいと思いました。

「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」改訂案

再現答案と合否の分岐点記入シート

ダウンロード

大学・学部・学科名／ A大学 理学部数学科（前期）　　教科名／ 数学

		予想得点率
大問1	$a^2-a=a(a-1)$ aは奇数より$a-1$は偶数となる また、aと$a-1$は互いに素であり、	100% 50 0

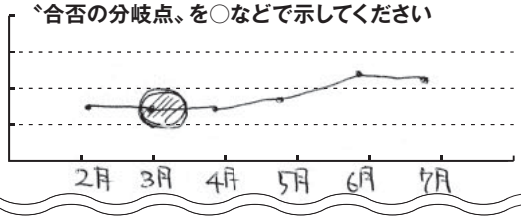
個別学力試験 教科別得点率	数学（70%）	理科（45%）	英語（60%）	センター試験得点率（合計）	（70%）

■入試を終えての感想　ほぼ例年通りの出題。予想した60%にあと少しだった。

◎生徒自身が振り返る入試対策〝合否の分岐点〟

先生のアドバイス通り、2年生の春休みにそれまでの模試で間違えた箇所を全部洗い出したのがよかったと思う。3年生の1学期、自分の弱点分野を学校の問題集の基本例題で確認

〝合否の分岐点〟を○などで示してください



データを生かす指導の流れ

3年生が作成した再現答案から「合否を分ける解答力」を教師が読み取ったり、それを身に付けたりするプロセスを2年生が具体的にイメージできる工程を盛り込む。

1. 合否を問わず、3年生に再現答案の作成を依頼する。この時、「合否の分岐点」も振り返ってもらう。
2. 集まった再現答案を用いて教科団が模擬採点を行い、教科指導力の向上の場とする。
3. 再現答案と「合否の分岐点」を2年生に開示する。

「もっと響く指導」のために改訂すると…

生徒には再現答案作成の際、その教科の入試対策を振り返り、高校生活のどこが合否の分岐点だったかまで自己分析してもらうのですね。これなら2年生も受験勉強をイメージしやすくなりますね。

先輩本人が分岐点を振り返ることで、日々の学習の延長線上に大学受験があることを生徒に伝えることが出来ます。再現答案作成は、入試まっただ中の3年生にとって負担になるのは事実です。しかし、教師が実際に採点し、3年生に補強ポイントを明示できれば、後期日程などの対策に生かすことが可能です。

再現答案は後輩たちのためだけに作成するものではなく、その作業を通して後期日程入試などの答案作成力アップを図れるものに出来れば、取り組みの価値は大きく高まりますね。

入試本番でのミスを悔やみ、次の入試に向けて気持ちを切り替えられない生徒は少なくありません。そうした生徒にとって、再現答案の採点が「出来なかったことを冷静に振り返り、次に生かす」機会になると判断できれば、3年生の学年団として更に積極的に取り組みたいと思えるものになるはずです。

「もっと響く指導」のポイント ②

合格者の特性を精緻（せいち）に言語化して ぶれない3年間の合格ストーリーを共有する

模試の判定別に合格状況を見ることで、「同じD・E判定でも、細部まで見ていくとその質の違いが分かってくる」など、判定の読み取り方を共有できました。ただ、そうしたテクニカルな話題から、「合格力を持った生徒を、3年間を掛けてどう育てるか」という大きな視点の議論に発展できればより有意義だったと思います。

「生きたデータ」2013年2月号を参考に、合格ストーリーづくりに取り組んだところ……

図3　3年間の合格ストーリー　設計シート　ダウンロード

●第1志望合格者を増やす手立て（12年度結果より　判定値は○○模試）

A判定	B判定	C判定	D判定	E判定
24人合格/28人中	42人合格/56人中	41人合格/80人中	31人合格/104人中	22人合格/132人中
この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導		この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導	この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導	

私の狙い

「難関国立大」「国公立ブロック大」など、大学層別に第1志望に合格した生徒像を言語化し、共有したかった

取り組み内容

合格した生徒のデータを基に、各大学層で模試の判定別に第1志望合格者を増やす手立てを、3年生の学年団で話し合った

感じた課題

合格者の成績の特徴や模試の成績表の読み取り方は共有できたが、具体的な生徒像や3年間を通した育成の手立てまで議論が深まらなかった

これから4月に掛けて、校内で自校の指導の強みや弱点を整理し、3年間の生徒の合格へ向けた成長ストーリーを改訂していくことになります。次年度、各学年でどんな指導を行うかを検討する際の資料として、進路部から発信したいと思っていますが、合格ストーリーづくりのコツのようなものはあるのですか？

合格ストーリーづくりの目的は、生徒が「高校生活を充実させることが、実は合格の近道」であることを再認識し、更に教師間での指導のぶれを防ぐことにあると思います。例えば、私たちは「清掃が行き届いているクラスは、入試実績も良い傾向にある」ことを経験的に理解しています。クラス環境を大切にする気持ちと行動力は、教室での集中力と無縁ではありません。しかし、そうした生徒の人間的成長が成績の伸びに結び付いていることを、全ての教師が確信しているわけではありません。そのため、合格ストーリーを言語化し、その本質を校内で伝承することが困難な高校もあります。

正直に言えば、私も「育成したい生徒像」をきちんと言語化し、他の先生に説明する自信はありません。なんとなく分かってはいるつもりなのですが……。

そうだとすれば、合格ストーリーづくりは、当たり前のことを徹底した時に、生徒にどんな成長があるのかを言語化して共有する作業であり、私たちの指導のよりどころになるものと言えそうですね。

ベネッセ教育総合研究所 http://berd.benesse.jp

生きたデータ 検索

HOME→教育情報→高校向け→
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも同じウェブサイトでご覧いただけます。併せてご活用ください！

2009年度2月号 「次年度につなげる総括・引き継ぎと3年生からのデータ収集」
2006年度10月号「3年生2学期の意識付け」
2006年度4月号 「入試結果データの見せ方」

「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」改訂案

合格した生徒特性から指導を考える検討シート

ダウンロード

●第１志望合格者を増やす手立て（13年度結果より　判定値は○○模試）　受験大学層【　難関国立大　】

A判定	B判定	C判定	D判定	E判定
2人合格／ 3人中	3人合格／ 5人中	5人合格／ 10人中	2人合格／ 5人中	0人合格／ 4人中
◎合格した生徒特性（学習習慣、生活習慣など） 個別学力試験で戦える教科が2つはある。自宅学習は「量」より「質」。将来のイメージを持ち、興味・関心の幅が広い。精神的に安定している。		◎合格した生徒特性（学習習慣、生活習慣など） 個別学力試験で戦える教科が1つはある。模試の見直しを必ず行っている。学習上の悩みが少ない。指導に素直に耳を傾ける。	◎合格した生徒特性（学習習慣、生活習慣など） 3年夏以降の伸びが顕著。基本的生活習慣が身に付いており、学習効率が良い。授業中の集中力が抜群。がむしゃらに勉強に向かえる。	
◎この層の合格者を増やすために注力すべき指導 選りすぐりの問題を解かせる。教えすぎない。着想と思考プロセスを重視。「生きた教養」を育む環境をつくる。		◎この層の合格者を増やすために注力すべき指導 過去問の徹底研究。答案を作成するという意識の向上と実戦力の育成。個別学力試験での超苦手科目の克服。質を重視した学習内容の確認。	◎この層の合格者を増やすために注力すべき指導 興味・関心を広げながらバランスのとれたセンター試験対応学力を養成する。個別学力試験で戦える科目をつくる。第1志望を貫かせる個別指導。	

◎3年間を通してこだわりたい指導のキーワード
教えすぎない　自律　学習効率を上げるプロセスを重視する
夢を語り合える面談と、夢を実現させる教科指導

データを生かす指導の流れ

「どのような学習習慣・生活習慣の生徒が合格しているのか、それは日頃から教師が生徒に指導しているものと同じか」を検証し、更に徹底していく場とする。

1. 3年生の学年団で、合格した生徒の特徴を学習習慣・生活習慣などシーン別に洗い出す。
2. 「第1志望合格者を増やすポイント」を3年間を視野に入れて分析し、次年度の3年生の学年団に伝える。
3. 更に1年生、2年生の学年団にも共有してもらうことで、「学校全体として大切にすること」を徹底する。

「もっと響く指導」のために改訂すると…

「難関国立大」「国公立ブロック大」「難関私立大」など、生徒の受験大学層ごとに、第1志望に合格した生徒は3年間をどのように過ごしたのか、学習面、生活面での特徴を出来るだけ具体的に挙げていくことで、合格ストーリーをつくるためのいろいろな観点が共有できそうですね。

生徒の特性を共有した上で、「そのために何をするのか」も具体的にしたいですよね。特に、秋の時点でD判定やE判定でも最終的に合格した生徒からは、彼らがなぜ合格できたのか、1年生からの学習面や生活面での特徴を皆で言語化することが大切だと思います。その過程で、指導のノウハウが継承されるはずです。

教師の目に映った生徒の特性を列挙していくだけでなく、生徒自身に自分の合格力を分析してもらっても良さそうですよね。それを1・2年生が見たら、とても参考になりそうです。

同感です。それは、再現答案作成時に書いた「合否の分岐点」とも共通しますよね。高校生活の日常の中に合格力を見いだせれば、私たちの3年間の指導はきっと一貫したものになるはずです。

半歩未来を考える 教育オピニオン

世界で戦える人材を育てる 東京大・学部教育の総合改革

東京大副学長、大学院理学系研究科生物科学専攻教授 福田裕穂（ひろお）

世界の大学に伍する教育・研究体をつくるために、積極的にグローバル化を推し進める東京大。4ターム制の導入、英語による授業、外国人教員の増員など、海外からの留学生を招致するための施策を次々と展開する一方、多様な学生を受け入れるために推薦入試の導入も決めた。改革の基底にある課題意識と改革の概要、初等・中等教育への期待を、福田裕穂副学長に聞いた。

自分で考え行動できる人材の育成が大学の使命

私が初めてドイツを訪れた1986年、ヨーロッパはグローバル化とは縁遠い状況でした。英語で話し掛けても対応できる店員はデパートにおらず、私の住んでいた都市ではトルコの人たちの排斥運動が行われていました。それが今、英語を聞いて逃げる店員はいませんし、トルコの人々はドイツの社会に溶け込んでいるように見えます。また、ヨーロッパ各地の大学では授業の英語化が進んでいます。このように、ヨーロッパのグローバル化は急速に進んだのです。

日本でも、企業が国内で技術を磨いていればよい時代は終わり、日本企業の工場が国外にあるのは当たり前になっています。私の地元である静岡県浜松市には部品を作る企業が多くありますが、技術者はアジアの国々に技術指導に出

東京大が推し進める学部教育改革とは

◎東京大は、社会の変革を先導する存在としての大学の役割を果たすべく、2009年に就任した濱田（はまだ）純一総長の下、「よりグローバルに、よりタフに」を基本理念とし、入試や学部教育などの改革について議論を進めてきた。

13年7月、「学部教育の総合的改革に関する実施方針」のアクションリストでは、5つの原則・方向性が示された。

①学びの質の向上・量の確保／GPAの活用による学習支援、成績評価の厳格化、FD活動の推進、4ターム化に伴う授業形態の変更など **②主体的な学びの促進**／点数至上の価値観のリセットを目指した導入教育の強化、ティーチングからラーニングへの転換を促す授業の改善、習熟度別授業の普及など **③流動性の向上と学習機会の多様化**／英語による授業や外国人教員の拡充、サマープログラムなど多様な学習体験の充実など **④学士課程としての一体性の強化**／カリキュラムの見直し、部局横断型教育プログラムの普及など **⑤教育制度の大枠の改善**／推薦入試の導入、秋季入学の環境整備に向けた社会への働き掛けなど

各教育研究部局が連携し、15年度末までにこれらの諸事項を実行する予定だ。

*この記事は、2013年12月末の情報を基に作成しています。

向いています。日本も世界に打って出て、戦っていかなければならなくなっているのです。

社会で求められる力も変わってきました。以前は、与えられた課題をいかに速く正確に解けるかが重視されました。企業や官公庁では、課題がある程度見えている中で、新しいシステムをつくることが求められ、東京大もそうしたことに長けた人材を数多く送り出していました。ところが、グローバル時代では、課題そのものが見えていないことが少なくありません。新しい世界をつくるためには、自分で課題を見付けて、その解決に向けてチャレンジしていける人材が求められます。

世界と戦える日本であるためには、これまでの教育を続けていくだけではもたないでしょう。世界の人々と協調しつつ、対等以上に渡り合える人材を育てることが、高等教育機関の使命だと考えています。

しかしながら、今の学生は以前に比べ、自分で考えて行動できる人が少なくなっている印象があります。課題を与えられないと何も出来ない、答えがないことに対して抵抗を感じる学生が増えています。社会では答えがないところで勝負していかなければならないのに、答えを与えられるのを待っているだけでは、世界に伍することは出来ません。

その原因の1つは、長年にわたる受験勉強にあると考えます。学生によっては幼稚園児の時から受験勉強に取り組み、1点でも多く取るために、問題を速く解く方法をたくさん覚えるような訓練を受けてきました。効率よく問題を解くことに慣れていて、自分で考えることを早々に放棄し、安易に答えを求めてしまうのです。失敗を嫌がり、挑戦する姿勢に欠けているのも特徴です。これらは、幼少時からの受験勉強の体験を通して染み付いた習い性といえるもので、大学入学後に変えようとしても遅いのです。

PROFILE

ふくだ・ひろお◎東京大理学系大学院植物学専門課程博士課程修了。大阪大理学部生物学科助手、東北大理学部生物学科教授などを経て現職。その間、理化学研究所植物科学研究センターグループディレクター、日本学術振興会学術システム研究センター主任研究員、日本植物学会会長などを兼務。日本植物細胞分子生物学会学術賞、日本植物生理学会賞、紫綬褒章など受賞歴多数。

東京大が推し進める大学のグローバル化

自ら考えて行動できる人材を育成するために、東京大では幅広く改革を推し進めています。

その中心は大学のグローバル化です。将来の秋季入学を見据え、1年の授業期間を4つに分ける4ターム制の導入を予定しています。海外の大学と学事暦を合わせることが容易になり、また、学生が短期留学をしやすく、海外からの留学生も受け入れやすくなるため、国際交流が活発になると期待されています。

13年度に始めた「初年次長期自主活動プログラム、英文名称FLY Program（＊1）」は、入学直後の学部学生が自ら申請して1年間の特別休学期間を取得する制度です。国際交流やボランティア活動、インターンシップなど、主体的な社会体験活動を支援するために取り入れました。海外との交流を活性化するために、現在、アメリカのイェール大学などと単位互換協定を結んでおり、将来的には3割程度の学生が海外経験を持っている状況にするのが目標です。

更に、教養学部では、「PEAK（Programs in English at Komaba）」も行っています。日本語以外の言語で初等・中等教育を履修した学生を受け入れるプログラムで、1学年約30人が入学しています。13年度に2年目を迎えましたが、早くも面白い効果が学内で表れています。

＊1　Freshers' Leave Year Program の略。

学生の母国語は主に英語なので、サークルの勧誘の場面では、呼び込みの日本人学生に英語で話し掛けます。すると、日本人学生の方も英語で話さざるを得なくなるので、サークルの勧誘の場が一気に国際化するのです。日本人学生と留学生のどちらにとっても良い刺激になっていると思います。

また、私が所属する理学部では、海外の有力大学の学部生を対象とした6週間のサマーインターンシッププログラム「UTRIP（University of Tokyo Research Internship Program）」を行っています。東京大や日本の大学の理学系研究科への留学に関心のある海外の学生に、講義や研究室などでの交流を通じて留学生活を体験してもらう内容です。定員20人に対して、ハーバード大やケンブリッジ大を含む世界中の大学から300人を超える応募がありました。

更に、理学部では、日本人学生の短期研修も積極的に後押ししています。研修先の大学で学生自らが入りたい研究室を訪問し、自分の研究内容ややりたいことをアピールします。研修は2週間ほどですが、自分で研究室を決めて交渉する経験は学生を大きく成長させています。

推薦入試で求めているのは目的意識の明確な学生

改革のもう1つの柱は、入試改革です。

新たに導入する推薦入試は、全学で100人程度を、出願書類と面接、センター試験の成績によって選抜する予定です。受験生や高校の先生方が関心を持たれるのは、高校時代の活動や実績がどのように評価されるのかだと思いますが、評価基準や方法は現在検討中です。ただ、私たちが望む人材像は明確で、自分で考える能力を持ち、考えたことを高いレベルで実践している、もしくはそのような経験がある学生です。

難しいのは、学生の活動や実績を評価するために、どのようなエビデンスを求めるかです。国際科学オリンピックのような国際的なコンテストの入賞歴などが含まれる可能性もありますが、そのような生徒は限られているので、受賞歴だけで評価するのも適切ではありません。推薦の基準は今後も検討を続け、13年度中にある程度の方向性を示したいと考えています。

推薦入試の導入には、目的意識の明確な学生に入学してほしいという狙いもあります。本学では、1・2年次は全学生が教養学部に所属し、2年次に「進学振り分け（以下、進振り）」を行って3年次に所属する学部・学科を決めます。進振りの趣旨からいえば、学生は、将来の目標に基づいて、1・2年次での履修科目を決めるべきですが、実際には、どの教員の科目が単位や点数を取りやすいか、どの学部なら進学しやすいかという観点で、履修科目を決める学生が少なくありません。中学校や高校での受験勉強と同じように、進振りのために良い点を取る勉強をしてしまうのも、入試対策で効率的な学習を繰り返してきた弊害だといえるでしょう。

本学の推薦入試は、「自分はこれがやりたい、だからこの勉強が必要です」と明確に言える高校生に挑戦していただきたいと考えています。推薦入学者については進振り後の学部・学科の所属についても、将来の目標に応じて、点数にかかわらず出来るだけ希望に添えるよう支援していく予定です。

高校生には自分の「好き」を究めてほしい

高校の先生方は多忙な校務の中で、非常に頑張っておられるというのが私の印象です。社会からさまざまなことを求められる中で、保護者の期待にも応えつつ、熱心に生徒に学力などさまざまな力を付けようとされています。ただ、生徒の進学希望をかなえようとするあまり、試験の点数を上げることに注力し過ぎている面もあるのではないでしょうか。大切なのは、社会に出た時に役立つ力を身に付けさせることです。

そのために、高校生には成功だけでなく失敗もたくさん経験してほしいと思います。難しい問題を解く時、すぐに答えを見るのではなく、自分で徹底的に考えてみる。理科の実験でも、失敗を恐れずにいろいろチャレンジしてみる。

「何でうまくいかないのだろう」という疑問から、生徒の好奇心を喚起することも出来るでしょう。

入試にかかわる学習以外で、生徒が主体的に打ち込めるものを設定するのもよいと思います。部活動や行事でも構いませんが、出来ればアカデミックな内容で、興味のあることをとことん追究させるのがよいと思います。生徒が主体的に取り組める課題学習やテーマ研究などもよいかもしれません。

好きなことに主体的に取り組み、その道を究めるくらい一生懸命に取り組んでいる生徒なら、東京大に限らずどの大学に入学しても必ず伸びるはずです。「究める」のは頂点に立つということではなく、その人なりに最大限の努力をすることです。何かにとことん打ち込んだ経験、成功や失敗から学んだ経験は、たとえ志望とは違う大学に進んだとしても、必ず生きてくるはずです。日本全体でそういう学生が増えれば、日本の将来は良い方向に変わっていくに違いありません。

日本の国力を支えているのは学力

高校時代のさまざまな体験や活動は大切ですが、それらを推進する上で前提となるのは、文系理系を問わず、幅広い基礎学力が身に付いていることです。例えば、理系だから文系科目を勉強しないのでは、社会に出た後に必ずつまずくでしょう。理系の研究者は、海外に渡った時にサイエンスについてだけ議論するとは限りません。宗教や歴史、文化の話になった時、自分のものとしてそういった会話が出来なければ、研究者としても尊敬を得られないのです。

子どもたちは、特定の教科を単純に暗記教科と捉え、学習内容を覚えればよいと考えがちです。授業では、学習内容の背景まで興味が持てるような話をしていただけると、学問の本質に興味を持つ生徒も増えると思います。私の高校時代の生物の先生は、遺伝学がご専門で、自身でも発見をされるような方でした。授業では研究にまつわる話が多く、教科書のみをきちんと教える授業ではありませんでした。しかし、先生の生き生きとした話に引き込まれ、私は生物学に興味を持つようになりました。先生がいなかったら、研究者を目指すことはなかったと思います。

英語は、少なくとも東京大の理系学生にとっては必須科目です。英語で論文が書けて当たり前の世界ですから、世界と渡り合おうと思うなら、基礎的な英語の学力はしっかり身に付けておかなければなりません。そのために、理学部化学科では、大学院・学部の授業を英語で行う予定にしています。

中学・高校の英語指導については、実際に英語を使える技能が身に付いていないという批判もあります。ただ、アジア圏からの留学生を見ていると、英語を話すのは得意でも、意味が通らない英文を書くことが少なくありません。その点、日本の学生は話すことは得意ではないかもしれませんが、文法はしっかり身に付いているので、文章の意味は通っていますし、ある程度難しい英文を読むことも出来ます。必ずしも今の英語教育を否定する必要はないのです。コミュニケーションをする上で必要な力をどのように身に付けていくのかを、しっかり考えていけばよいのだと思います。

今の日本の国力を支えているのは、間違いなく学力です。詰め込み教育などいろいろと批判もありますが、先生方が全ての子どもにしっかりした教育を行ってきたからこそ、今の日本があるのです。しかし、既に話してきたようにグローバル社会の中で、これまでの教育だけでは世界で戦っていけなくなりました。これまでの教育のよいところを残しつつ、言い換えると基礎学力を担保しつつ、新しい課題に挑戦する意欲と戦略を持つような人材を育てていく必要があると考えます。これは、初等・中等教育だけでなく高等教育の課題でもあります。

教育はこれからも日本の礎であり続けることは間違いありません。先生方には、課題解決能力だけでなく、課題発掘能力や実践力を含めた真の学力を生徒に身に付けさせるための教育をしていただきたいと心より願っています。

分子を計測する技術を開発し生体への物質の影響力を立証

九州大大学院　総合理工学府　物質理工学専攻　原田明（はらた）研究室

環境汚染や疾病の要因を突き止めるためには、物質が生体にどのような影響を及ぼしているかを解明する必要がある。それには物質の分量や状態を正確に測定することが不可欠だが、温度や湿度によって形態が安定しないため、測定方法が確立されていない物質も多い。九州大大学院総合理工学府の原田明教授は、試行錯誤を重ねて、不可能と思われることを可能にする過程にこそ研究の魅力があると話し、複数の光線を照射することによって液体内の分子を測定する方法を研究している。

フローチャートで分かる原田明研究室

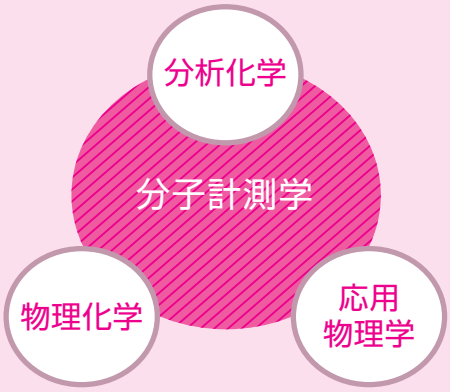
大学院生の主な出身分野

- 化学
- 物理学
- 材料工学
- 機械工学

など

◎物質の最も基本的な構成要素である分子について研究する学問であるため、化学や物理学を専攻した学生が多く集まる。ものづくりを志して大学に入学した学生が、学部時代に分子の性質や機能に対する関心を高め、大学院で分子計測学を研究するようになるケースも多い。

研究にかかわる学問分野と研究内容



◎分子の性質や機能を分析するため、同じく分子を研究対象とする化学や物理学との関連が深い。物質を分析し分子の機能を把握する分析化学、光線を用いて物質を測定する物理化学、電気信号によって分子の分量を数値化する応用物理学など、複数の分野の知見を集めて研究に取り組んでいる。

研究成果と社会のかかわり

- 政策立案のためのデータ提供

など

◎分子計測技術を開発すると共に、分子の性質や機能に関するデータを公開。物質を基礎から分析できる技術であり、物質の性能を把握できるデータであるため、汎用性が高く、疫学や薬学などさまざまな分野で用いられ、環境汚染や疾病の要因を解明し、改善することに生かされている。

論理的に知識を活用し、仮説を立てる力が大切

分子計測学が求める学生像

論理的思考力

持続力　広い視野

分子計測学は、物質を測定するための方法を見つけ出す学問です。化学や物理学などの公式や解法をただ覚えているだけでは、今まで通りの結論しか得られません。新たな方法を発見するためには、公式や解法が導かれる理由まで把握し、それらを必要に応じて自在に組み合わせて用いる必要があります。知識を身に付けるだけでなく、知識を論理的に活用する力があってこそ、新発見につながる仮説を立てられるのです。

根気よく実験に取り組む力も、必要です。仮説を裏付けられるようなデータはなかなか得られないので、面倒がらずにコツコツと研究を続けなければなりません。実験結果が予想と大きく外れれば、精神的に動揺することもあります。しかし、落ち込んでいるだけでは研究は前に進みませんから、失敗の要因をしっかり分析することが重要です。

また、学際的な広い視野を持つことも求められます。自分の専門以外の分野の知見も取り入れることで、柔軟な発想が生まれるからです。他分野でどのような実験を行っているかを知っていれば、機材を必要に応じて改良したり、自作したりする必要に迫られた時、それらを解決するためのヒントも得られるはずです。

高校生へのメッセージ　書物は知識の源ですから、本を読むことが好きになると視野は大きく広がると思います。まずは自分が面白いと思う本をたくさん読みましょう。楽しければ続けられますから、読書の習慣が身に付くはずです。

原田 明 教授

はらた・あきら　九州大大学院総合理工学府物質理工学専攻教授。博士課程教育リーディングプログラム「グリーンアジア国際戦略プログラム」コーディネーター。東京大大学院工学系研究科博士課程修了（工学博士）。東京大助手、九州大助教授などを経て、現職。「光熱変換分光法による非破壊3次元分析法の開発研究」により、1993年日本分析化学会奨励賞を受賞。

研究を志したきっかけ

環境調査に携わり測定できない物質が多いことを知った

長野県の諏訪湖の近くで生まれ育った私は、高校時代に環境問題に関心を抱くようになりました。きっかけは、クラス対抗のボート大会に向けて諏訪湖で練習していた時、湖水に植物プランクトンなどが大量に繁殖していることに気付いたことです。当時、社会問題になっていた環境汚染について、新聞やテレビのニュースで知識として知るだけでなく、身近なこととして実感し、「自然環境を良く出来るような技術を身に付けたい」という気持ちが芽生えたのです。研究成果を社会に還元しやすいのではないかと考え、大学は工学部を選び、進学後は大気汚染の調査などに積極的にかかわりました。

環境汚染の要因を突き止めるためには、温度や湿度などの外的な条件にかかわらず、あらゆる物質を検出し、その分量を正確に測れるようにする必要があります。ところが、水の上に浮かぶ分子や固体に付着した分子など、測定しにくい物質がたくさんあることを学びました。1990年代末にマスコミなどで大きく取り上げられた環境ホルモンも、私の学生時代には気体中の濃度を測る方法がありませんでした。

「環境汚染が生じる原因を科学的に立証するための、正確な情報が不足している」と感じるようになった私は、物質を測定する技術を開発する学問、分子計測学の研究を志すようになったのです。

研究概要

液体内の分子に複数の光線を照射し反応を見取る

私は、液体内の分子の存在量を測ることで、物質の状態を把握する研究に力を入れています。液体内では油脂やタンパク質などが障害となり、何の分子がどの程度、どのような状態で存在するかを正確に測りにくいため、気体内や固体内に比べると測定技術の開発が進んでいません。

つまり、この分野には多くの未知の可能性が秘められているということです。例えば、血液内にある分子の種類と分量を把握できるようになれば、細胞1つひとつに対して、ど

の分子がどれくらいの量で影響を及ぼしているかが見えてきます。

分子は細胞の10000分の1ほどの大きさしかないため、1つでは細胞に対して劇的な影響は及ぼさないと、理論上は考えられるのですが、1つの細胞に1つの分子しか侵入しない濃度の薬品によって、生体に悪影響が出たように見えるケースなどが報告されています。その要因を解明するためには、細胞の変化と、分子の量や作用との因果関係を明らかにしなければなりません。

研究は、分子への光線照射によって行います。液体内の分子は、光に当たるとエネルギーを持ち、光を発したり、高調波[1]を生じたりと、分子の性質によってさまざまな反応を示します。それを数値化することで、分子の存在量を測定できるのです。ただ、分子によって反応する光の種類や波長などが異なるため、パルスレーザー光[2]やシンクロトロン光[3]といった複数の光線を用い、それらを組み合わせたり、波長を変えたりして照射しています。必要な波長の光線を発する装置が市販されておらず、自作することもしばしばです。

液体に溶けている分子の状態も、分析しています。液体内の分子の機能を解明するために、分子1つひとつの様子を把握したいのですが、分析装置を標準的に用いるだけでは、溶液1リットル中で約0・01マイクロモル[4]以上の濃度に達していないと溶質を検出することが出来ません。1リットル中に10の16乗個以上集まった状態でしか分子の様子は分からないのです。また、溶質を化学変化によって別の分子に変えなければならないことも多く、全ての分子の性質に迫れるわけではありません。

そこで、分析する分子の性質に応じて異なる温度の溶液を用いるなど、装置の使い方を変えています。分子を吸着させる固体を変えたり、検出機を自作したりと、更に低い濃度の溶液でも分子を検出できるように、装置自体にも工夫を加えています。

確立された手順にただ従うだけでは、新たな発見は出来ないと思います。試行錯誤を重ねて自分で手順を見いだすことが重要なのです。今まで不可能だったことを可能にする過程にこそ研究の醍醐味があると、私は感じています。

研究の成果と展望

あらゆる分子を測定できる技術の開発を目指す

私の学生時代から現在までの30年ほどの間に、国内外の研究者によって、液体内の分子計測技術も随分進歩しました。蛍光分子[5]は1つひとつを測定できるようになっています。ただ、アミノ酸や核酸塩基などの生体関連物質に多く含まれる、非蛍光分子の測定には課題があります。それが測れるようになれば、生体機能をより正確に把握できるようになるはずです。

私は近年、実態がよく分かっていなかった、液体と気体や固体との境界面に存在する分子の計測も積極的に行っています。研究の結果、蛍光分子が境界面にいくつ、どのような状態で浮かんでいるかを測定可能になりました。研究を更に進め、あらゆる分子について、外的環境による性質変化の仕組みを明らかにしたいと考えています。分子の機能を解明し、必要に応じて変化させられるようになれば、特効薬の開発などにもつながると期待しています。

用語解説

1 高調波
基本周波数の整数倍の周波数の電気。東日本の商用電源周波数50Hzを基本波とすると、第2次高調波は100Hz、第3次高調波は150Hzとなる。

2 パルスレーザー光
短い間隔で点滅するレーザー光。

3 シンクロトロン光
真空中で光速に近い速度で進む電子が発する光。電子の進行方向が変えられた際に発生する。

4 マイクロモル
モルは溶液の濃度の単位の1つで、1リットル中に溶けている溶質の量を表す。マイクロモルは、モルの100万分の1。

5 蛍光分子
光線を照射するとよく光る性質の分子。光線を照射しても光りにくい性質の分子は、非蛍光分子と呼ぶ。

6 ナノ粒子
ナノとは10億分の1を表す言葉。ナノ粒子は、最長の幅が1～数百ナノメートルの粒子を指す。

7 指示薬
イオンの濃度などを判定するために用いる試薬。

8 基
化学反応の際、分解せずまとまったまま分子から分子へ移動する原子団。

大学院生が語る

代謝効率を測る指標を実用化したい

冨田健太郎さん

とみた・けんたろう　九州大大学院総合理工学府物質理工学専攻博士後期課程3年。福岡県立城南高校卒業。

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 小学生の頃から理科が好きだった私は、高校は普通科の理数コースを選びました。普通コースに比べて、実験が多いことに魅力を感じたからです。せっけんを作る化学の実験では、油脂などの材料次第で洗浄力や手触りの異なるものが出来ることを実感しました。社会に役立つものづくりをしたいと考えるようになり、大学で化学を学ぶことに決めたのです。

大学4年生の時に所属した研究室では、燃料電池を研究しました。研究を通して、基材の表面に分散させた触媒微粒子の、表面に吸着した物質の違いが、得られる電力の違いとして現れることに興味を持ち、表面の専門家を志すようになりました。そこで、表面の分析を行っている原田先生の研究室に修士課程1年生から所属するようになったのです。

Q 原田先生の研究室での研究内容を教えてください

A 金のナノ粒子[6]を用い、水中のイオンを計測する研究に取り組んでいます。金のナノ粒子はレーザー光線を照射すると、表面に付着した物質によって異なる光り方をします。私はこの性質を応用し、生体内の薬物代謝を担う物質、硫酸イオンの濃度を測る指示薬[7]を作りました。

指示薬が出来るまでは試行錯誤の連続でした。金のナノ粒子に硫酸イオンだけを直接、選択的に吸着させることは出来ませんから、硫酸イオンを選び取る性質がある有機物、チオ尿素基[8]を持つ分子で、金のナノ粒子を覆うことを試みました。ところが、水中に分散した金のナノ粒子を水に溶けない分子で覆うと、金のナノ粒子が凝集し、役に立たなくなってしまいます。チオ尿素基で覆った金ナノ粒子を水に溶けやすくしようと実験を繰り返した末、水に溶けやすい分子とチオ尿素基を持つ分子とを混ぜ合わせて覆うという、新たな方法を見いだしたのです。この方法で試作した指示薬では、光る強さが硫酸イオンの濃度に応じて変わることを発見しました。苦心がようやく実ったと感じ、うれしさがこみ上げてきたことをよく覚えています。

今後は、硫酸イオンの濃度が一目で分かるように指示薬を改良し、実用化を図ります。代謝効率を測る指標になると期待しています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 硫酸イオンの指示薬作りは、失敗の連続でした。それでも諦めなかったのは、なぜ期待通りの結果が得られないのかを考察することが楽しかったからです。

皆さんにも、「なぜ?」を考える面白さを知ってほしいと思います。スマートフォンが動く仕組みなど、身の周りには自分では説明できないことがあふれているはずです。そして、納得できる理由を見つけるために、本などで調べましょう。疑問を持ち、その答えを自分で探す力は、今後ますます社会で求められると思います。高校時代にその基礎をしっかり身に付けておいてください。

私の高校時代

納得するまで打ち込んだ釣りの擬似餌(ぎじえ)作り

●高校時代は趣味の釣りに熱中し、特に擬似餌作りにこだわりました。

擬似餌は、餌となる魚やミミズなどに似せて作っても、必ずしもよく釣れるわけではありません。釣ろうとする魚によっては、実物とは似ても似つかない色と形をした擬似餌を用いた方がよい場合もあるのです。それはなぜなのかと疑問を持ち、どの魚がどのような擬似餌に反応するかを図書館で調べるようになりました。ただ、文献からだけでは抽象的な情報しか得られず、いま一つ納得できなかったので、「自分で作ってみよう」と考えたのです。擬似餌作りでは、素材の大まかな加工が出来たら、自宅近くの川で動きを確認し、形を修正する作業を繰り返しました。1つ仕上げるまでに、数か月かかることもありました。

納得がいくまで打ち込む経験は、諦めないで研究に取り組もうとする今の姿勢の素地になっていると思います。

VIEW'S REPORT

グローバル化時代の人材育成を考える④

スーパーグローバルハイスクールで求められる取り組みのポイントとは

文部科学省が2014年度に始める「初等中等教育段階におけるグローバル人材の育成」事業の内容が確定した。本誌でも13年12月号でその概要を伝えたが、今回は「スーパーグローバルハイスクール」と「社会総がかりで行う高校生留学促進事業」について、更に詳しい内容や12月号で示した内容からの変更点などを、文部科学省初等中等教育局国際教育課の河村裕美（ひろみ）課長補佐に聞いた。

2014年度は予算約8億円 指定校は50校程度でスタート

2014年度の政府予算案が決定し、「スーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）」事業には約8億円が計上されました。この決定を受けて、指定予定校数は50校程度とし、1校当たりの支援金額は1600万円を上限とし、取り組みに応じた支援金額を支給することにしました。

事業内容を精査する中で、概算要求時から内容を変更した点がありますので、まず紹介します。

1点目は、事業概要です。概算要求時に盛り込まれていた「外国語（特に英語）を使う機会の飛躍的増加」という表現と、「先進的な人文科学・社会科学分野の」という表現を削除し、「急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け」る教育の重点化等に取り組む高校等を「『スーパーグローバルハイスクール』に指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を進める」としました。

SGH事業は、教育再生実行会議で提言されたもので、国際的に関心の高い社会的な課題に対して、何らかの解を見いだすことが出来る次世代のリーダーを育てるための事業です。国際的な社会課題を解決するためには、まず、なぜその現象が起きているのかという原因を見極めなければいけません。また、その課題に対して日本はもちろん、各国はどう考えているのか、異なる立場の国の考えを知ったり、解決に当たっているリーダーの考え方を学んだりする必要があります。そして、いろいろな人と意見交換をしながら、自分の考えを明確にしていくことが重要です。

つまり、グローバル・リーダーの素養として最も大切なのは、課題を発見し、それを解決する力であり、そのため、幅広い教養やコミュニケーション能力、使える英語が必要になってくるということなのです。国際会議などで活躍しているリーダーたちも皆、最初は初心者で、さまざまな立場の人の意見を聞き、議論を重ねる中で、グローバルな視点や考えを持つようになったのではないでしょうか。だからこそ、SGHでも、そのような体験が出来る課題研究を求めています。グローバル・リーダーの養成というと、英語力を身に付けることに目が行きがちですが、英語力のみではないことをしっかりお伝えしておきたいと考えています。

より国際的な視点に立った研究課題選びを

もう1つ、事業概要の中で「先進的な人文科学・社会科学分野の」という表現を削除した背景には、より広い視点で研究課題を設定していただきたいという意図があります。

「スーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）」において行う理数系の実験対象は「自然物（Nature）」であるのに対し、SGHの研究対象は「人が創り出したもの（Art）」といえるのではないでしょうか。国際社会でよく話題にされるテーマや、国際的な紛争に発展しているテーマなどは、文理融合や新領域の内容であることが少なくありません。SGHの目的は、グローバル・リーダーとしての国際的素養を身に付けることであり、学問分野にとらわれ過ぎないようにすることが、研究課題を選ぶ上で大切になると考えます。

国内外の大学生をサポーターとして活用

課題研究では、課題研究にかかわる指導官や外国人教員の派遣など、大学等との連携が欠かせません。課題研究を進める中で、生徒の論理的思考力や分析能力などを高めることがSGHの目的なので、協力していただく大学の先生や企業の方にしっかり指導していただけるように、課題研究内容に関する専門性を有する先生や企業の方と連携することが大切です。

なぜならば、本事業で取り上げられるであろう国際的な社会課題は、インターネットなどで情報収集をすれば、ある程度は知識としては深められるものだからです。しかし、それでは生徒の思考力を鍛えたり、スキルを身に付けさせたりすることは出来ず、本来の目的を達成できないことになってしまいます。そうした意味で、学校がどのような大学や企業等と連携するかというリソース選びや体制づくりは重要だといえます。

また、大学教員や企業の方だけでなく、大学生を「サポーター」として活用するのも1つの方法だと考えます。欧米やアジアの難関大学を突破した大学生の中には、非常に多面的に物事を捉え、社会的な課題に対して関心が高く、論理的に話すことが出来る方がいます。

海外の大学では、学生は長期休業の前半にインターンシップやアルバイトなどを行い、最後の1か月間は社会貢献活動としてボランティア活動に従事する場合が少なくありません。その時期を利用して、生徒たちとディスカッションをする機会などを設けるのも効果的かと考えます。また、日本にいる留学生や、海外に留学したことがある日本人の大学生に協力を依頼してもよいと思います。

教育課程の研究開発と発展的な実践、両タイプを募集

14年1月、SGH指定を希望する高校や教育委員会などの関係者に向けて、審査基準などの詳細を伝える公募説明会を行いました。その内容は次のようになります。

SGHは、グローバル・リーダー育成に資する課題研究を中心として、教育課程の研究開発を行う学校と、既に先進的な課題研究を行っている実績を踏まえて発展的な実践を行う学校の両方を募集します。

国際的に関心が高い社会課題やビジネス課題をテーマとして、大学などと課題研究に取り組むことにより、おのずとグローバル・リーダーとしての資質が身に付くと考えています。既に、そのような課題研究を行っている学校については、その実績を踏

文部科学省
初等中等教育局
国際教育課課長補佐
河村裕美
かわむら・ひろみ
教育助成局財務課、初等中等教育課、特別支援教育課、JSPS国際事業部、大臣官房国際課等を経て現職。SGH、高校生留学支援事業、留学キャンペーン「トビタテ！ 留学JAPAN」を立ち上げ、事業設計に携わる。

まえて、課題研究で行った提案が効果的かどうか実践したり、研究結果を更に深めるために海外でフィールドワークを行ったりと、単なる提案で終わらずに成果発表と更なる研究を続け、積極的に行動する学校に対しても支援したいと考えています。既存の取り組みを支援するのではなく、SGHの指定によって、更に発展的な教育が期待できるかどうかを審査するということです。

12月号でも言及しましたが、例えば、SSHの指定を受けている学校が、普通科や学校全体でグローバルな社会課題を研究課題として研究開発を行う場合には、SSHとSGHの2つの指定を同時に受けるケースも考えられます。

また、学校長の下、学校全体としての組織的な研究開発体制の整備が図られていることや、事業の成果検証が行えること、管理機関（国立の高校等は当該学校を設置する国立大学法人、公立の高校等は当該学校を所管する教育委員会、私立の高校等は当該学校を設置する学校法人）の独自の取り組みや支援、指定期間終了後の継続的な取り組みの実施を求めています。国の支援だけでなく、管理機関自らも支援してSGHの活動の成果を上げることも大いに期待しています。

また、14年度以降、SGH指定を希望されている学校にお願いしたいのは、3年後、5年後の成果を測れるよう、指定開始時点での高校の現状をしっかり把握し、その後の取り組みの成果を定点観測できるような体制を整えていただきたいということです。全校共通の成果目標等は文部科学省で用意していますが、具体的な目標は高校ごとに異なります。そのため、目標設定と評価方法を明確に整備することが大切になると考えます。

SGHの指定は5年間ですが、指定終了後の5年後にどうしたいかという中長期的な展望もしっかり描いておいていただきたいと思います。

高校の教育プログラムの1つとして短期留学を支援

早い時期から海外体験を積ませることを目的とした「社会総がかりで行う高校生留学促進事業」は、前年度と比べて1億円増の予算が盛り込

「スーパーグローバルハイスクール」事業内容

2014年度予算額（案）806,514千円（新規）

目的　急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する。

事業概要　国際化を進める国内の大学を中心に、企業、国際機関等と連携を図り、グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、グローバルなビジネスで活躍できる人材の育成に取り組む高等学校等を「スーパーグローバルハイスクール」に指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を進める。

■**指定期間**　2014年度から5年間
■**指定対象学校**　国公私立高校、中高一貫教育校（中等教育学校、併設型および連携型中学校・高校）　■**指定校数**　計50校程度

文部科学省 → 管理機関（設置者）　連携・協力 → 国際化を進める大学　連携　企業、国際機関（OECD、UNESCO等）、非営利団体等

文部科学省：・学校の指定（5年間）・指導、助言、評価・支援
管理機関（設置者）：指導・助言・評価
企業、国際機関（OECD、UNESCO等）、非営利団体等：人材、プログラムの提供

スーパーグローバルハイスクール（SGH）

主な取り組み
- ●グローバル・リーダー育成に資する課題研究（例：国際的に関心が高い社会課題）を中心とした教育課程の研究開発・実践（教育課程の特例の活用を想定）
- ●グループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーション、プロジェクト型学習等の実施（英語によるものも含む）
- ●海外の高校・大学等（ESDを通じたユネスコスクールを含む）と連携した課題研究に関するフィールドワーク、成果発表等のための海外研修
- ●帰国・外国人生徒の積極的受け入れ、大学との連携を通じた外国人留学生とのアカデミックなワークショップ
- ●大学との連携を通じた、課題研究内容に関する専門性を有する帰国・外国人教員の活用

大学との連携
- ●課題研究に関する指導を行う帰国・外国人教員等の派遣や、大学生によるサポート
- ●国際展開を担当する部署との連携を通じた海外研修等の企画・立案に関するノウハウの伝授
- ●入試の改善による生徒の学習内容の適切な評価
- ●単位認定を含む高大連携プログラムの提供

グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、グローバルなビジネスで活躍できる人材（国際機関職員、社会起業家、グローバル企業の経営者、政治家、研究者等）の輩出

まれました。14年度は、1年間の長期留学に行く高校生300人に、1人当たり30万円を支給します。また、国としては初めて、2週間以上1年未満の短期留学者に対しても、1300人を対象に1人当たり10万円を支給します。そして、それらの支援とは別に、自治体にも独自の留学支援事業の拡充を求めていきます。

短期派遣を支援対象にしたのは、短期間であれば海外に行ってみたいという高校生は多いと思われるからです。短期であっても、世界に触れることで自分自身についてより深く考え、多様性に触れることで日本を改めて意識し、また学びたいという意欲が上がるという効果は少なくないと捉えています。

今回の短期派遣支援の特徴は、学校教育活動の一環として実施することです。教育活動プログラム自体は、各自治体の教育委員会が主体となって作成しても、高校が独自に作成してもかまいません。民間のプログラムを学校の教育プログラムとして採用するという方法もあります。

学校教育活動の一環として実施するとなると、企業の協力による事前・事後学習なども組み込むことになり、教育効果がより高まると期待できます。また、効果的な海外派遣プログラムをつくれば、高校の評価も高まることになり、結果的に高校の教育改革につながるのではないかと考えています。

これまでの留学事業では、留学における教育効果は留学をした生徒本人にしか還元されず、周りへの波及効果が薄いという課題を抱えていました。しかし、学校教育活動の一環とすることによって、そうした課題を解決できます。保護者にとっても、高校が実施する短期派遣の教育プログラムの方が、安心して子どもを参加させられるのではないでしょうか。

このように、国・自治体・企業が一体となって高校生の留学の機会を増やしていくことが、「社会総がかりで行う高校生留学促進事業」の狙いです。この事業と並行して、文部科学省では「トビタテ！　留学JAPAN」というキャンペーンを行っています。社会全体で若者の海外経験の機会をサポートし、グローバル人材の育成を図っていければと考えています。

社会総がかりで行う高校生留学促進事業

2014 年度予算額（案）291 百万円（2013 年度 190 百万円）

補助事業

高校生留学促進事業（実施主体：都道府県）　222 百万円（2013 年度 122 百万円）

地方公共団体や学校、高校生の留学・交流を扱う民間団体等が主催する海外派遣プログラムへの参加、もしくは個人留学する者（個人留学は長期のみ）に留学経費を支援する。なお、短期留学は原則、学校単位での募集とする。

◎ 支援金額：長期（原則 1 年間）1 人 30 万円× 300 人、短期（原則 2 週間以上 1 年未満）1 人 10 万円× 1,300 人（新規）

グローバル人材育成の基盤形成事業　69 百万円（2013 年度 68 百万円）

① グローバル語り部の派遣

（21百万円／ 2013 年度 20 百万円）　実施主体：都道府県

かつての帰国生や留学経験者、海外勤務経験者、国際機関等の勤務経験者を留学フェア等や小・中・高校等へ派遣し、体験講話の機会を設け、子どもたちの国際的視野の涵養を図る。また、都道府県内にコーディネーターを配置し、グローバル語り部の派遣に関する関係機関との調整や、留学に関する各種の相談に応じる。

② 異文化理解ステップアップ事業

（31百万円／ 2013 年度 31 百万円）　実施主体：民間団体

日本語を学ぶ外国人高校生を、高校生の留学・交流を扱う民間団体を通じ、日本の高校に短期招致することにより、受け入れ先の高校生の異文化体験や相互コミュニケーション、学校教育における国際交流等の機会を確保する。

●対象：115 人（前年度同）、通訳なしで高校生等とコミュニケーション等が取れる程度の日本語能力を有する者。

留学フェア等や学校に派遣

受け入れ学校以外での外国人高校生との交流の場の確保

③ 留学フェア等の開催

（17百万円／ 2013 年度 16 百万円）　実施主体：都道府県

高校生留学等を推進するためのフェアを各都道府県内で開催し、安心・安全な留学への関心を喚起し、留学への機運を醸成するとともに、留学後の進路を見据えた大学フォーラム、キャリアフォーラムを開催する。

メニュー例　●高校留学や海外大学進学に関する情報を有する民間団体等による留学相談　●各国大使館による外国の魅力の紹介　●国際化に力を入れる大学とのマッチング　●企業のリーダーによる講義　等

予算外の取り組み

・民間（企業・個人）からの留学支援金の寄付促進　・各都道府県の留学支援または留学環境整備に対する取り組みへの助言　等

ウェブで参観できる シリーズ「授業大公開」がオープン!

英語　2014年2月14日公開

兵庫県立川西緑台高校 **大目木俊憲** おおめぎ・としのり

生徒が「英語で考え、情報を得た」と実感できるよう、英語で授業を行う

◎導入の15分で『教科書を読みたい』と思わせる

私が初めて英語で授業を行ったのは、初任校１年目の時です。つまらなそうに授業を受けている生徒たちを見て、試しに英語で授業をしてみたのです。英語が苦手な生徒でも意欲的に取り組む姿を見て、私はその意義を感じ、それ以降、英語で行う授業のあり方について考えてきました。

授業で最も大切にしているのは、生徒に「英語で考え、英語で情報を得た」と実感させることです。そのため、生徒が「教科書を読みたい」と思うように、導入の15分に力を入れています。続いて、生徒が教科書の素材文を理解しやすくなるよう単語や熟語の確認をした上で、素材文の内容に関する質疑応答を行います。ここでは、素材文の最初の行についてから質問するのではなく、要点となる内容について聞いたキー・クエスチョンを投げ掛けます。全ての質問に答えた時に、生徒が素材文の内容をある程度、把握している状態にするわけです。

もっとも、英語で授業を行うことにこだわるあまり、生徒が正しく情報を理解できなければ本末転倒です。英語だけでは情報を伝え切れない場合、日本語で指示を出したり、日本語で考えさせたりするようにしています。例えば、今回の授業で扱った地雷の問題は、解決方法をしっかり考えてほしいと思い、英語で考えるのは難しいという生徒には日本語で考えるよう指示しました。

◎英語による授業は緊張感を生み、集中力を高める

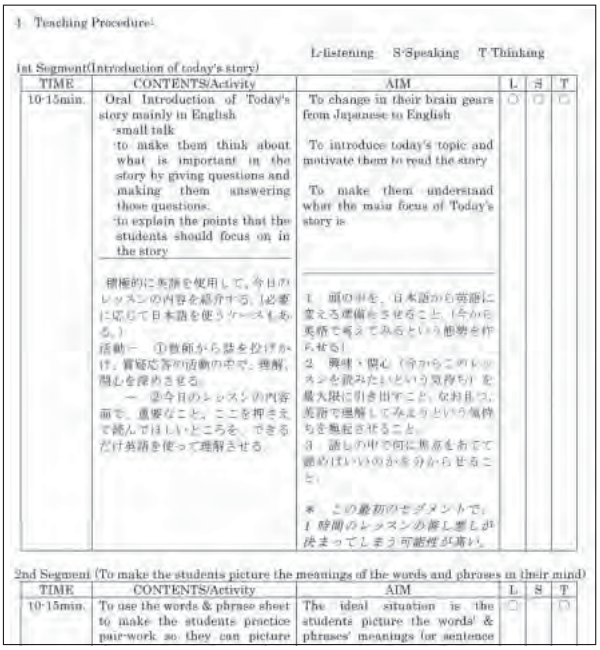
英語で授業を行うメリットの１つは、生徒の集中力が高まることです。True or False やＱ＆Ａのように質問がパターン化してしまうと、生徒はそれに慣れ、次第に集中力が低下していきます。しかし、英語で授業を行うと、生徒はどんな形で質問されるのかを予測できないため、緊張感が生まれ、授業に集中するのです。また、英文から情報を得るスピードが速くなり、英語力が向上する成果も見られます。

◎肩ひじを張らず、自分なりの方法で内容を伝える

英語の授業を英語で行うことに悩まれている先生にお伝えしたいのは、１行目から全て英語で話そうと肩ひじを張らなくてもよいということです。教科書の素材文の内容を最初から最後まで全て伝えるというスタンスから少し発想を変えて、自分なりの方法で素材文の内容を伝えてみてはいかがでしょうか。

私の授業を見ていただき、さまざまなメッセージをお寄せいただければ幸いです。

■大目木先生のティーチングプラン ＊ウェブサイトで全てご覧いただけます



4. Teaching Procedure:

L:Listening　S:Speaking　T:Thinking

1st Segment(Introduction of today's story)

TIME	CONTENTS/Activity	AIM	L	S	T
10-15min.	Oral Introduction of Today's story mainly in English ・small talk ・to make them think about what is important in the story by giving questions and making them answering those questions. ・to explain the points that the students should focus on in the story 積極的に英語を使用して、今日のレッスンの内容を紹介する。(必要に応じて日本語を使うケースもある。) 活動一　①教師から話を投げかけ、質疑応答の活動の中で、理解、関心を深めさせる。 一　②今日のレッスンの内容面で、重要なこと、ここを押さえて読んでほしいところを、できるだけ英語を使って理解させる。	To change in their brain gears from Japanese to English To introduce today's topic and motivate them to read the story To make them understand what the main focus of Today's story is 1. 頭の中を、日本語から英語に変える準備をさせること。(今から英語で考えてみるという態勢を作らせる) 2. 興味・関心(今からこのレッスンを読みたいという気持ち)を最大限に引き出すこと。なお且つ、英語で理解してみようという気持ちを触発させること。 3. 話しの中で何に焦点をあてて読めばいいのかを分からせること。 ＊この最初のセグメントで、1時間のレッスンの盛上がりが決まってしまう可能性が高い。	○	○	○

2nd Segment (To make the students picture the meanings of the words and phrases in their mind)

TIME	CONTENTS/Activity	AIM	L	S	T
10-15min.	To use the words & phrase sheet to make the students practice pair-work so they can picture	The ideal situation is the students picture the words' & phrases' meanings (or sentence	○		○

アクセスはこちら！

ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（http://berd.benesse.jp）にアクセスいただき、トップ画面右のメニューバーから「シリーズ　授業大公開」を選択してください。

教師全体の教科指導力を向上させるためには、指導内容・方法の共有が不可欠であり、その場として設けられるのが公開授業です。ただ、時間的・地理的制約などで誰もが参加できるわけではありません。そこで、ベネッセ教育総合研究所は、実際の授業を撮影した動画をウェブ上で発信する形での公開授業を実現しました。初回は２人の先生が登場。ぜひご覧いただき、ご自身の授業改善にお役立てください。

地理　2014年3月14日公開予定

神戸大学附属中等教育学校　**高木　優**　たかぎ・すぐる

個人思考の時間を大切にすることで、グループでの言語活動の効果を最大化させる

◎グループ学習と生徒との対話を組み合わせた授業

私は新任の頃から、生徒と対話をしながら授業を進める生徒参加型の授業を心掛けてきました。それに、本校が50年以上継承してきたグループ学習の要素を組み合わせたのが、今の私の授業スタイルです。

今回公開する授業では、ヨーロッパの中でも生徒が具体的なイメージを持ちづらい東欧について考察しています。教科書では、東欧はＥＵの中でも労働賃金が安く、労働力の供給場所と位置付けられており、日本の製造業も進出して西欧で売る製品を製造している、とされています。そうした理解が本当に正しいのかどうか、データを基に検証するのがテーマです。

私の授業では、自作のワークシートを使いながら、テーマについて個人で深く考える時間、仲間と共有して視野を広げる時間を設け、それを基に個人の考えを更に深めていくというプロセスを大切にしています。

◎個人学習とグループ学習の繰り返しで考えを深める

今回の授業を例にして説明します。まず、個人で東欧のイメージを考えてシートに記入し、続いてグループで、ヨーロッパ、アフリカ、ユーラシア大陸を中心とした３枚の世界地図を使って、東欧の地理的な位置付けを考えます。

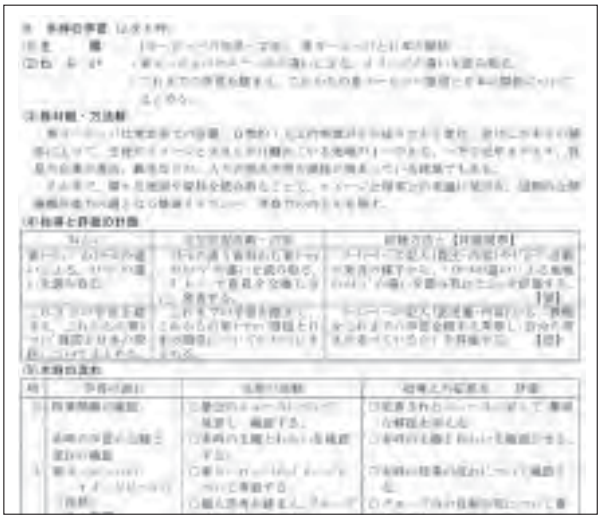
次に最新の論文を提示し、教科書とは別の切り口から東欧の産業構造について考察します。グラフを丁寧に見ると、東欧では確かに製造業は多いのですが、ポーランドにある日系企業の50％以上が卸売・小売業であり、東欧に近いオーストリアには日本企業の販売統括部門があることが分かります。これらは、東欧が労働力の供給場所というだけでなく、市場としても開拓が見込まれていることを示しており、そこに生徒が気付けるかどうかが、今回の授業のポイントです。

グループで話し合った内容をホワイトボードに書いて発表し、全体で共有した後、個人で本時の授業を踏まえて、東欧と日本との関係を100字程度の文章でまとめ、授業は終了となります。

グループ学習を取り入れた授業は、講義型の授業以上に生徒の意欲を引き出せることが、テストの結果でも明らかになっています。同じ単元について、４年生（高１に該当）には言語活動を取り入れた授業、５年生（高２に該当）には講義型の授業と分けて行ったところ、４年生の方がテストの点数が良いという結果が出ました。

授業公開の際、私が意識しているのは、先生方が気軽に取り入れられる授業をすることです。これからも、先生方が「これならやってみよう」と思えるような授業を追求していきたいと考えています。グループ学習や言語活動を取り入れてみたいという先生は、ぜひ、本校へ授業見学（＊）にいらしてください。

■高木先生のティーチングプラン　＊ウェブサイトで全てご覧いただけます



＊２月21日（金）に神戸大学附属中等教育学校の授業研究会が行われます。詳しくは、下記URLにアクセスしてください。
http://www.edu.kobe-u.ac.jp/hudev-s-fuchutop/kenkyu/kenkyu2013/H25kenkyukai-2jiannai.pdf

社会状況の描写、主体性を育む指導に共感

12月号の特集で、座談会に登場された千葉県・私立芝浦工業大学柏中学・高校の早川千春先生の「1つの軸だけで人を比べる社会は不幸ですが、どの軸でもはっきりと比べてもらえない社会も若者にとっては生きにくい社会です。だから生徒はどの場面でも目立たないようにしているのだと思います」という指摘に深く共感した。また、指導事例を読み、山梨県立甲府南高校・三枝（さいぐさ）正人先生がされている、多様性に気付かせて他者を意識する中から自分の未来を考えさせる指導は、主体性を育む観点から重要であると感じた。

［埼玉県・匿名希望］

授業、学級指導、部活動など、教育活動の全てで主体性を育みたい

高校には、「生徒指導＝生活指導」と捉える教師がまだまだ多く、じっくり待つ姿勢が取れない教師もいると思う。12月号の特集を読み、若手教師に刺激を感じてほしいと願った。主体性の育成は学校生活の一場面では出来ない。授業、学級指導、部活動など教育活動の全てで、そして、我々が共通理解と共通行動で育てていかなければならないと改めて思った。

［静岡県・匿名希望］

校内協議を踏まえた言語活動の事例を知りたい

12月号「新課程　教科指導最前線」を読み、言語活動を取り入れるには、生徒がグループやクラスの仲間と協同することが求められるが、同時に、それ以上に教師同士が協力・連携し合うことが求められると思った。教科内での意思統一、更には、何を何のために求めていくのか、校内での統一が必要だ。新課程になり、これらが協議されている学校は実際にどの程度あるのだろうか。何人かの先進的な個人に頼ることなく実施している事例を知りたい。

［富山県立桜井高校・山口康子］

教職員の協力体制と熱意が学校や生徒を変える

12月号「指導変革の軌跡」に掲載された「普通科単位制」高校である大阪府立槻（つき）の木（き）高校の取り組みは3つの点で大変参考になる。1点目は、単位制でありながら、生徒指導を徹底できていること。2点目は、統合整備の機会を最大限活用していること。3点目は年間50回以上にも及ぶ徹底した広報活動だ。これらは、学校長以下、全教職員の協力体制がなければ実現し得ないと考える。平野裕一校長の「個人商店ではなくブランドショップ街にしたい」という言葉にも感銘を受けた。また、沖縄県立読谷（よみたん）高校の取り組みも興味深かった。安仁（あに）屋宗一郎先生による「毎回の模試直後の全員面談」は、通常、担任がクラスの生徒と行う面談が年に数回であることを考えると、その熱意が生徒を変えていると感じた。

［福井県立若狭高校定時制・中森一郎］

読者のページ

Reader's VIEW

Volume 6

読者の先生方からのご意見を紹介します

教師川柳

羽ばたいて 新たな景色 見るために

神奈川県・大吉

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム
開催報告レポートのご案内

これからの英語の指導と学びを考える

―全国の高校入試分析結果と中高生の英語学習実態をもとに―

2013年12月1日、中学校・高校の英語教育を考えるシンポジウムを上智大学で開催いたしました。全国から270人を超える皆様にご参加いただき、ありがとうございました。指導事例のご紹介、ご参加の先生方とパネリストとの意見交換も行いました。これらを含めたシンポジウムの詳細なレポートを、2月下旬に下記ウェブサイトでご案内します。報告書もダウンロードできます。ぜひご覧いただき、今後のご指導を考える上でのご参考になりましたら幸いです。

詳しくは　アークル　英語教育　検索

http://www.arcle.jp/

＊ARCLE（アークル、Action Research Center for Language Education）は、ベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です

編集後記

◎「勉強を教えるのは塾の先生でもよいかもしれない。でも、生き方を教えてくれるのが学校の先生」。今回の取材で、卒業生の方がおっしゃっていました。先生方には、最も大切な教育の本質的な議論がなかなか出来ないようなお忙しさがあることと思います。でも、日々の先生方の熱のこもった実践の中で、子どもたちは育まれ、日本の未来はつくられていくことを改めて実感しました。全ての子どもが幸せになるように。笑顔が溢れる学校になるように。先生方にエールをお送りできる『VIEW21』でありたいと思います。今年度もお読みいただきありがとうございました。（青木）

VIEW21 2月号 Vol.6　2014年2月14日発行

発行人　岡田晴奈
編集人　谷山和成
発行所　（株）ベネッセコーポレーション　ベネッセ教育総合研究所
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　中丸満
撮影協力　筒井岳彦、荒川 潤、ヤマグチイッキ
イラスト協力　カモ

情報編集室
〒206-8686 東京都多摩市落合1-34
電話　042-311-3390

©Benesse Corporation 2014

VIEW21 2014 April 4月 Volume 1

次号は 4月10日発行（予定）
『VIEW21』高校版は年6回の発行です

Benesse®

Cover Story

教師と生徒の肖像

楽しく学ぼう！

表紙の学校

愛知県・私立名古屋中学・高校 宮田淳弥（じゅんや）先生

「英語は使って、伝わって、初めてうれしいものだと伝えたい」と話す宮田淳弥先生。授業では、単語テスト、文法の問題演習、スキットのリスニングに音読と、生徒は「読んで書いて、聞いて話す」の連続だ。活動の合間には洋楽も流す。文法事項においては誤答しやすい箇所を強調し、大学入試に問われやすいポイントを解説。問題演習中には机間指導で細かい間違いを指摘し、将来使える英語の基礎づくりを支援する。

この日の授業のフィナーレはペアで行うスキットの暗唱だ。「What kind of fruit do you like?」「What is your favorite book?」などの先生の質問に対して答えが同じ者でペアを組み、暗唱のスピードを競う。負けたらその場でスクワット。教室は、ペアの生徒を探し、互いに負けじと暗唱する生徒の声で大いに盛り上がった。「単に音読をするのではなく、ゲーム性を取り入れながら、相手を探すために英語で話し掛けるコミュニケーションの場にもしています」と先生は話す。

宮田先生には留学経験はない。ＡＬＴと話し、校外の研修会に自主的に参加するなど、今も毎日が勉強だという。「日本にいながらもしっかり学べば、英語でコミュニケーションが取れるようになることを生徒に示したい。結果よりも、良い準備をすることが大切で、そのための学ぶ時間はいくらでもつくれることも伝えたい」と先生。面談ではびっしりと書き込みがされた自身の手帳を見せながら、生徒に時間の使い方を考えさせることもある。

「宮田先生の授業は、時間が経つのが早い。習ったことを使えるようになるのが楽しい」と、生徒が言った。時間を忘れるほど引き付けられる授業が、生徒を自ら学びへと向かわせている。

VIEW21
2014 February ● Vol.6
ビュー21 2月号／2014年2月14日発行／通巻第344号
発行人 岡田晴奈　編集人 谷山和成
発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2014

お客様サービスセンター
［フリーダイヤル］
0120-350455
受付時間（祝日、年末・年始を除く）
月～金 8:00～19:00／土 8:00～17:00
株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社
〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17